

南共和・新宮遺跡

児玉町遺跡調査会報告書第6・7集

みなみきょう わ
南共和・しんぐう
新宮遺跡

1 9 9 5

児玉町遺跡調査会

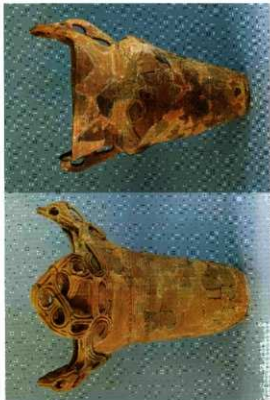


圖 11-1-15 中國傳統燈籠的內部結構

序

埼玉県の北西部に位置する児玉町は、南側に秩父の峰嶺から送る上武山地を背し、北側に女瀬川や前赤根川によって開拓された沖積低地の田園地帯が広がる、自然と縁に恵まれた真に風光明媚な町であります。それとともに、児玉町にはこの恵まれた自然の大地に、先人達の各時代にもわたる多くの文化遺産が埋蔵文化財として残っており、県内でも屈指の「文化財の宝庫」として注目をされています。

しかしながら、この児玉町でも近年の交通網の整備による経済圏の拡大や、一極集中化に連動した地方都市の通勤圏拡大による都市化が進み、それに伴う民間や公共の大小様々な開発が増加し、我々がこれまでに慣れ親しんでいた自然景観や生活環境も急速に変化しつつあります。

このような社会状況の変化に対応して、児玉町内でもこれまでに様々な開発に伴う記録保存のための発掘調査が多くの遺跡で実施されています。それらの発掘調査によって、膨大な出土資料の蓄積とともに、当地域における多くの歴史的事実が次第に明らかになりつつありますが、これらの貴重な歴史資料と調査の成果を、今後ますます人々の関心と意欲が高まっていく生涯学習の場にかかし、将来的発展に立った町づくりに役立たせていくことが、まじかに迫った21世紀に向けての、我々の大きな課題と言えます。

今回報告する南兵衛遺跡と新宮遺跡の発掘調査につきましては、草津住吉氏や株式会社を始とする多くの方々や関係機関より、文化財保護に対する深いご理解と様々なご協力を賜りました。ここに心より感謝申し上げますとともに、本冊が学術研究や教育活動に広く活用されることを念願する次第であります。

平成7年3月10日

児玉町教育委員会教育長
児玉町遺跡調査会会長
冨 丘 文 雄

目 次

序 言

第I章 発掘調査に至る経緯	1
第1節 南共和遺跡(A地点)の経緯	1
第2節 新宮遺跡(D地点)の経緯	1
第II章 遺跡の立地と環境	3
第III章 南共和遺跡(A地点)の発掘調査	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 検出された遺構と遺物	8
1. 型穴式住居跡	8
2. 竪穴式住居跡	11
3. 土 壘	11
4. 溝 跡	11
第IV章 新宮遺跡(D地点)の発掘調査	20
第1節 遺跡の概要	20
第2節 古墳・奈良時代の遺構と遺物の概要	26
1. 型穴式住居跡	26
2. 円形周溝遺構	27
第3節 縄文時代の遺構と遺物の概要	28
1. 型穴式住居跡	28
2. 土 壘	27
3. 土 溝	21
4. 土 器 品	107
5. 石 器	102
参 考 文 献	117
写 真 図 版	

児玉町遺跡調査会組織

- 会 長** 宮内 文雄（児玉町教育委員会教育長）
- 理 事** 飯島 三郎（児玉町文化財保護審議会委員長）
渡本 守雄（児玉町文化財保護審議会委員）
武内 和雄（児玉町文化財保護審議会委員）
野口 敏郎（児玉町文化財保護審議会委員）
土屋 重男（児玉町教育委員）
高松 豊（児玉町教育委員）
山口 豊一（児玉町十代次長議員）
水村 和雄（児玉町十代議員）
山口 謙助（児玉町十代議員）
大塚 豊（児玉町教育委員会社会教育係長）
- 監 事** 宮内 文雄（児玉町教育委員）
小島 和子（児玉町文化財保護審議会委員）
- 幹 事** 岡部 宏典（児玉町教育委員会社会教育係長兼幹事）
越上 敏男（児玉町教育委員会社会教育係長幹事）
渡本 謙（児玉町教育委員会社会教育係長）
藤本 敏雄（児玉町教育委員会社会教育係長幹事）
武内 賢二（児玉町教育委員会社会教育係長幹事）
中津美恵子（児玉町教育委員会社会教育係長幹事）
池田内昭彦（児玉町教育委員会社会教育係長幹事）
佐山 善典（児玉町教育委員会社会教育係長幹事）
大塚 敏也（児玉町教育委員会社会教育係長幹事）

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

第1節 南共和遺跡(A地点)の経緯

平成元年3月、熊本県大宇術高等学校(以下「大宇術高校」)の敷地内に古墳群を調査している上野宮有希の指導で古墳より、国史庁指定内の歴史文化財の所在について熊本県教育委員会に照会があった。

熊本県教育委員会では、照会のあった築山子遺跡を「河下宮遺跡保護」と照会したところ、築山子遺跡-22号遺跡の北東地帯敷地内に位置していることから、歴史文化財が所在する可能性が高いと考えられたため、照会者に対し築山子遺跡内の歴史文化財の所在については、試掘調査を実施して明確にする必要があることを説明した。

翌日後、熊本県より国史庁教育委員会に試掘調査の実施があり、3月18日に築山子遺跡内の試掘調査を実施したところ、古墳の柱礎跡と中冪の遺跡が確認された。この結果、築山子遺跡内における歴史文化財の所在が明確になったため、築山子遺跡は歴史文化財が所在するため現状保存することが望ましいが、やむを得ず現状変更する場合は事前に記録保存のための発掘調査を実施する必要がある」と3月23日付け熊旅社第228号により回答し、文化財保護に対する理解と協力を求めた。

その後、熊本県と熊本県教育委員会が築山子遺跡内の歴史文化財の保存管理については譲り受けたが、すでに開発計画が進行しており、築山子遺跡を現状保存することが困難であることから、やむを得ず発掘調査を実施して記録保存することになった。

発掘調査の実施にあたっては、調査機関として熊本県遺跡調査会を紹介したが、すでに平成元年度の発掘調査の手配は一杯であり、本年度中における調査の実施が不可能であったため、発掘調査は次年度中に実施することになった。そして、年が経った平成2年2月28日に国史庁遺跡調査会会長御行敏雄と熊本県の間で発掘調査に関する委託契約が締結され、4月より築山子遺跡での発掘調査が実施される運びとなった。

なお、発掘調査に関わる届出は、文化財保護法の規定に基づいて、平成2年2月1日に国史庁遺跡調査会長より「歴史文化財発掘調査届」が、熊本県より「歴史文化財発掘届」が熊本県より「歴史文化財発掘届」が熊本県教育委員会と熊本県教育委員会を経て文化庁長官に提出された。

第2節 新宮遺跡(D地点)の経緯

平成元年3月、熊本県大宇術高等学校(以下「大宇術高校」)の敷地内の土壌について、同地を所有する新井ハコ氏より、同地内の歴史文化財の所在について熊本県教育委員会に照会があった。熊本県教育委員会では照会のあった土地について「遺跡保護」と照会したところ、同地の歴史文化財包蔵地である国史庁%-001(新宮遺跡)の敷地内に位置しており、また北宮集落が遺跡を包囲したところ、遺跡は原形であったため準遺が困難ではあったが、縄文式土器を主体とする土器断片が表面されたことから、同地内には歴史文化財が所在する可能性が高くと判断された。そのため、歴史文化財の所在を明確にするには、試掘調査を実施する必要があることを照会者に対して説明した。

その後、新井氏より国史庁教育委員会に試掘調査の依頼があったため、同地内の試掘調査を3月22日に実施したところ、同地内にはその直前に土壌を主体にして、縄文時代の陶器土器や土器など多数

の遺物の所在することが確認された。この結果、同所は縄文文化財が存在するための取地で保存することが望ましいが、やむを得ず現状変更の場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施する必要がある」ことを同日付け発掘調査第1号により説明した。

その後、同地は柳屋鉄工株式会社により、同社の工場を建設する予定であることが明らかとなり、同社より近所町教育委員会に対して事前の発掘調査を実施してほしい旨の依頼があった。このため近所町教育委員会では、発掘調査を実施するにあたり、柳屋鉄工株式会社と協働調査計画に基づいて細かな協議を行った結果、発掘調査は「縄文伊勢吉野の敷地となる同地発掘の約1500㎡について実施し、同地発掘の柳屋鉄工社については記録保存を行う意向し、発掘調査の費用として近所町教育委員会を紹介した。しかしながら、同調査会ではすでに平成2年度までの発掘調査の予定が1行であったため、平成3年度の手続きに発掘調査を実施することになった。

かくして同所における発掘調査は、柳屋鉄工株式会社と近所町発掘調査会との間で発掘調査に関する協定が締結され、平成3年4月15日より実施された。

発掘調査の結果は、平成3年3月1日付けで柳屋鉄工株式会社代表取締役柳屋重太郎より「縄文文化財発掘品の届出」が、同く同日付けで近所町発掘調査会会長佐野(敏雄)より「縄文文化財発掘調査の届出」が、近所町教育委員会と近所町教育委員会を経て、文化庁長官に提出されている。なお、近所町教育委員会からは、原四郎の柳屋鉄工株式会社に対して、3月2日付け教文第3-16号による「同所の縄文文化財発掘地における土木工事等について」の通知があり、文化庁からは、近所町発掘調査会に対して、7月8日付け発掘第1の17号による「縄文文化財の発掘について」の通知があった。



図1 遺跡の位置

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

本遺跡は、女塚川の流域の左岸に広がる平坦台地の南縁部に位置する。女塚川の川流域は、女塚川を中心としてその両側に川流域では最大の沖積低地が形成されており、その西側には本庄台地が、東側には大久保山・黒山・生野山と呼ばれる土流台地の遺構に覆われて展開する低平丘陵より分厚された3つの段丘が階段状に沖積地と平行して存在している。本遺跡が立地する本庄台地上、群馬県との国境をなす沖積川の沿畔によって造成された新渡川地蔵橋の架大瓦葺遺構にあたり、群馬県や群馬の上川・駒形が深く侵襲する沖積低地の水田境とあまりに高差のない平野で広い台地である。標高は約10～200mを圍り、北東方向に向かって緩やかに傾斜している。このような地形的特徴を有する当地域には、古くより多くの遺跡が形成されており、それらは対側の沖積地に面する本庄台地の縁部、東部の麓上及びその斜下の台地上、沖積低地内の自然隆起土を中心に立地している。

先土器時代の遺跡は、発掘調査がないため明確なことは判らないが、当地域にも本庄台地上や西丘土を中心とした期の遺跡が存在することは十分予想される。現在のところ当地域では、大久保山麓上の本庄市大久保山遺跡(高松1986)で弥生1点、同じく東岸寺北遺跡(西廣1986)で縄文1点、生野山麓下の大久保川の内遺跡(黒島1987)でナイフ形石器とヒフレイクが各1点、本庄台地縁部の本庄市沖積地縁部(石塚1986)で縄文1点と銅器3点、足正町生野川遺跡(丹井1989)でナイフ形石器1点・銅器2点・土製瓦片遺物3点、同じく黒島遺跡(増田1982)で銅器1点が見つかっているだけである。これらの石器は、ほとんどが後述の遺跡の出土品などに似ていて出土したもので、出土位置が明らかなものはない。

縄文時代の遺跡は、女塚川下流域の沖積部に比べてかなり少ない。早期・中期・後期では、既述のところ遺跡が限られた遺跡に多く、既述上や台地上の遺跡から土器片や石器がごく少量出土しているだけであり、当地域では本遺跡を遺跡が立地するかなり希薄な状況であったことが想像される。このような状況は中期前半段階も変わりないが、中期中葉以降になると遺構の成立例が急増し、当地域の状況は大きく様変わりする様相が窺える。まず、群馬県群馬県境になると本庄台地上の沖積地縁部・西丘土遺跡・生野山麓川遺跡(本野1971)の3遺跡に、それぞれ遺跡の性質からなる小規模な集落が形成され、大久保山麓上縁部(西川1984)でも遺跡の土器群が出土されている。このうち本庄台地上の足正町にある3遺跡は、それぞれ時期による住居数の多寡はあるものの、その後連続的に集落が営まれ、加賀町式土器群(加賀町式土器)に大規模化が進み、3遺跡とも遺構集落を形成するようになる。これらの大規模集落遺構は、いずれも加賀町式土器群下・加賀町式土器群下にかけて集落のピークを迎え、加賀町式土器のうちに終結し、衰退を始めるようである。この3つの大規模集落遺構の位置と対応するように、3遺跡周辺の平坦台地縁部に足正町川遺跡・納屋遺跡・ヤド川遺跡(鈴木1991)、低地内の自然隆起土や隆起地上に本庄市生野川遺跡(増田1989)や足正町石籠遺跡、大久保山麓下の台地上に架大瓦遺跡(増田1979)など、いずれも加賀町式土器群の小規模な遺構と並行する集落が形成されることは注目されよう。後期になると、荒川や群馬川及び群馬川の越川をどの大瓦葺川河の流域に遺構の分布密度が高くなるのと対照的に、当地域の遺跡は再び希薄な状況となる。当地域では、生野山麓川遺跡で群馬県式土器を伴う土器が少量出土しているくらいで、土器片を少量出土する遺跡がほとんどである。このような現



圖 2 閩 粵 邊 境 的 地 理 通 道

1. 鹿耳門港 2. 湄洲港 3. 三下江港 4. 龍江口 5. 泉安港 6. 石碼港 7. 崇武港
 8. 平潭港 9. 平海港 10. 平海港 11. 古田港 12. 古田港 13. 西平港 14. 可塘港 15.
 深尾港 16. 立賢港 17. 大橋山港 18. 官塘港 19. 官塘港 20. 官塘港 21. 北溪
 港 22. 崇武港 23. 崇武港 24. 崇武港 25. 崇武港 26. 崇武港 27. 崇武港 28. 崇武港
 29. 崇武港 30. 崇武港 31. 崇武港 32. 崇武港 33. 崇武港 34. 崇武港 35. 崇武
 港 36. 崇武港 37. 崇武港 38. 崇武港 39. 崇武港 40. 崇武港 41. 崇武港 42. 崇武
 港 43. 崇武港 44. 崇武港 45. 崇武港 46. 崇武港 47. 崇武港 48. 崇武港 49. 崇武
 港 50. 崇武港 51. 崇武港 52. 崇武港 53. 崇武港 54. 崇武港 55. 崇武港 56. 崇武
 港 57. 崇武港 58. 崇武港 59. 崇武港 60. 崇武港 61. 崇武港 62. 崇武港 63. 崇武
 港

A. 崇武港 B. 崇武港 C. 崇武港 D. 崇武港 E. 崇武港 F. 崇武港
 G. 崇武港 H. 崇武港 I. 崇武港
 (1) 崇武港 (2) 崇武港

記は晩期においても同様であるが、さらに遺跡数は少なくなる。

新石器時代の遺跡は、前期～中期では大久保山遺跡の浅見山・黒沢(本谷山1986)で中期の縄文遺跡が散見されている他は、筑上町北遺跡(筑野内1989)や同じく筑野下遺跡(志戸内1989)で土器片が少量出土しているだけである。後期になると、筑野上や筑野下の台地上を主筆に、筑野上野山遺跡(筑野上1982)・筑野東遺跡・本谷山山頂遺跡(増野1989)・大久保山遺跡(筑野1989)・筑野上野山山頂遺跡(小久保1977)などの集落が形成される。これらの遺跡は、比較的短期間で小規模な集落と考えられるものが多く、その立地傾向から筑野内や筑野周辺の小規模な集落群を形成した初期の水田耕作や集落周辺の耕作を生産の基盤としていたことが推測されている(志戸内1989)。

古墳時代の遺跡は、弥生時代の遺跡の基盤とは異なり、前期から後期にかけて非常に多くの遺跡が形成される。これは西部の本谷山丘陵部や東部の筑野河川沿いにももちろんのこと、筑野内の自然丘陵上にも多くの集落が連続的に形成されるのが特徴であり、当地域の自然環境に分布が拡大し、当地域における縄文時代の季節的な開発がこの時代に始まったことが窺え、それを表付けるように筑野内でもこの時代の水田跡がいくつかの遺跡で検出されている。また、自然環境を適する筑野上には、場内では遺跡とされる4世紀中期の筑野上吉野神社古墳(増野1986)・生野野野原古墳(増野1986)・本谷山古墳塚古墳(増野1988、太田1991)、6世紀の古墳群1群である本谷山鏡子塚古墳(太田1973)と生野山鏡子塚(菅谷1984)といった環状墳がいずれも初年度の首長墓が集中して造営されており、当地域が古墳時代の域社会の中心地域であったことが窺える。その後これらの筑野上は、生野山古墳群(菅谷・増野1973)や本谷山古墳群(小久保1977)といったそれぞれ総数100以上の大規模集落が形成されるが、本谷山七色塚遺跡(増野1989)や四方田遺跡(増野1988)の環状集落が存在した筑野内の自然丘陵上にも築山古墳群(本谷山1989)など一帯に古墳群が形成されている。

これらの古墳時代の集落は、7世紀中葉頃を境にして、筑野内の自然丘陵上に立地する集落のほとんどが縮減し、沖積低地を取り囲むように筑野西部の本谷山丘陵や東部の筑野下周辺に集落する現象が見られる。特に本谷山丘陵上では、筑野河沿い内遺跡(築山1989)や本谷山の西宮山遺跡群などのように、古墳時代後期から集落する様相が見える集落もいくつかあるが、本谷山今井遺跡群(筑野・増野1984)や本谷山野山遺跡群(筑野・菅谷1986)及び古井村・野野原遺跡(井上1986・菅野1988)のように、古墳時代には集落が形成されていなかった丘陵にも新たに集落が出現することは注目され、8世紀には本谷山南大谷野原内遺跡(増野1987・1989・1991)から筑野町筑野東遺跡(築山1989)にかけて内陸部遺跡を形式に分布する大規模な環状墳が形成されるようになる。このような集落居住域の再編成とも見える現象は、沖積低地内における環状墳群の集上や本谷山丘陵上の自然丘陵の整備によって台地上を編成する「筑野大集」(築山1989)の配列など、当地域に見られる7世紀後半～8世紀前半の環状墳の群列性と空間に連動した計画的編成であることが推測され、国家主導による集約的東方集約の完成が、地方の集約においても実質的に進められていた可能性も窺える。

これらの本谷山丘陵上に形成された大規模は、数回8世紀後半頃まで継続的に営まれるが、9世紀後半になると衰退し、10世紀以降では筑野町築野遺跡(筑野1982・1989)や筑野山遺跡のように、再び筑野内の自然丘陵上にも比較的小規模な集落が形成されるようになる。



图1 南海和东海水池图

第三章 南共和遺跡(A地点)の発掘調査

第1節 遺跡の概要

本遺跡は、「埼玉県史跡調査」記載の近世前期の遺跡に該当する岡物の縄文文化前代遺跡であり、女畑川中流域の西側に広がる標高約20mの平坦な本上古地上に位置する。本遺跡周辺の本上古地層遺跡では、数々の調査に伴う事前の発掘調査や試掘調査が数多く実施されているが、その結果によると今回調査した地点の西側では羽黒塚・百重川遺跡(史上1986、赤塚2008)につながる古代の大規模跡に遺構が発見されたことがなく、今回の調査地点は遺跡のほぼ全域にあたると思われる。今回の調査地点でも、事前の試掘調査により縄文前期地内の遺構分布を明確にしたところ、予定地内の西側半分には第2号遺跡の延長部分以外に遺構は確認されていない。

調査区内で検出された遺物は、縄文式土器(野・底文鉢形土器1種・土器2器・遺跡2器・ビッコ多数)、遺物の遺物(型は比較的良質である。これらは古代と中世の明確にわたるものであるが、本遺跡の土器をなすのは古代の縄文土器である。

縄文式土器は、縄文前期前半から中期前半頃にかけての時期のもので、調査区南西側の第1号住居跡、調査区北側の第1号住居跡、調査区北東側の第1号住居跡の3箇所によって分布している。この3軒の住居跡は、住居形式で重複するものはないが、比較的成熟しているものが多く、出土土器からも時代感が認められる。住居の土壌方向は、南北方向の古代集落で一般的に認められる傾向と同じように、いずれも北東-南東の向きにとっており、オマドも住居の北東側に付設されるいわゆる「東オマド」であるが、このうち第1号住居跡は後に東から西にオマドが作り替えられている。住居の形は、典型的に古い第1・3・5号住居跡が比較的整った方面を呈し、住居の掘り込みが深いのに対して、時間的に新しい第2・4・8号住居跡は長方形もしくは長方形の平面形を呈し、住居の掘り込みがやや浅くなっている。土間はいずれもムフロックを厚層に含む硬質赤土を基とした築地式で、第1号住居跡と第3号住居跡では床下土壌が検出されている。土壇穴をもつものに少なく、第2号住居跡で検出された以外に、第1号住居跡と第3号住居跡で土壇を設けたものと考えられる同形の浅い掘り込みが住居の各コーナー部に見られるだけである。土壇穴をもつものも少なく、第2号住居跡と第3号住居跡に見られるだけである。オマドは、いずれも土壇が住居の壁を掘り込んで構築されているもので、土壇部と土壇部が重複して軸を土壇部が重複掘り付けているもの(第2・4・5・8号住居跡)と、オマド掘り方に壁から土壇部まで土を掘り返らせて作っているもの(第1・3号住居跡)の2形態がある。このうち住居の第1号住居跡では、壁を掘り返らせて後の構築に利用している。

直立柱状土器は内容が不明であるが、遺物の内身が縄文式土器と同じ方向であり、柱穴上の遺構からも縄文式土器の時期に伴うものであろう。この土壇2号土壇も古代の土壇と考えられる。

中世の遺物は、第1号土壇と第2号遺跡だけであるが、出土遺物がないためこれらの明確な時期は不明である。

出土遺物は、縄文式土器より土器・信濃器・百重川(鉄製土・磁石)・鉄製器(刀子・鏃・刺)が出土しているが、ほとんどの住居跡は厚土中からの土壌が調査である。この中で第3号住居跡は、オマド内や南側より予定に近い遺構が比較的多く出土しており、良好な保存料と評されるものである。

第2節 検出された遺構と遺物

1. 型式柱遺構

第1号柱遺跡(第4図、図版2)

調査区の南西端に位置する。在室竪穴部の外側に一辺り大きい方形の浅い掘り込みを有する。遺構は、外側の浅い方形の掘り込みが東西-北東方向0.00m、北西-南東方向0.00m、内側の型式基が東西-北東方向0.76m、北西-南東方向0.66mを測る。主軸方位は北東方向を向き、N-32°Eをとる。床面は比較的堅固で、平直に作られている。床面は全周し、各コーナー部には土柱を用いた角土足かかれ木炭の浅い形跡の掘り込みが見られる。カマド(第5図)は、在室北室部中央やや東寄りの位置にあり、壁に対してはほぼ東西の向きに掘り込みで構築されている。遺構は、全長144cm・幅66cmを測る。天井部の間接の壁にあたる部分には壁が斜めに倒れ、天井部と遺構部から両室部の床面には黄褐色土が認められている。

角土遺構(第20図)は、壁土や土体にして比較的多量の土器片が混在している。No.1-3の遺構はカマド部の斜壁に倒れたもので、No.1とNo.3に入れた穴に重なっている。No.4はカマド西、No.5とNo.6は北西角コーナー部の円形の掘り込み内より角土している。この遺構はすべて遺土中からの出土である。

第2号柱遺跡(第4図、図版3)

調査区中央部の内側に位置し、在室柱部の遺構には第3号柱遺跡と第4号柱遺跡が近接している。平面形は方形を呈し、幅端は東西-北東方向0.22m、北西-南東方向0.00mを測る。主軸方位は北東方向を向き、N-50°Eをとる。床面は比較的堅固で、やや凹凸が見られる。床面は全周し、カマド右側の住居部隅コーナー部には貯蔵穴状の不整形凹を呈する掘り込みがある。カマド(第5図)は、住居北室部の東寄りの位置にあり、壁に対してやや傾めの向きに掘り込みで構築されている。遺構は、全長122cm・幅62cmを測る。柱は木製だけ残っており、淡褐色粘土を大塚寺から送り付けて作っている。黄褐色の中層部を呈し、床面よりも一段低くなっている。掘り込みはやや傾めに立ち上がり、壁面は比較的よく残っている。

角土遺物(第20図)は、土器片が比較的少量出土しただけである。No.1の煎茶器高倉片は住居中央部の壁土中より、No.4の上層部層は在室中央部の床面上より出土し、No.2の遺とNo.3の上層部層はカマド内から角土している。

第3号柱遺跡(第4図、図版4)

調査区中央部に位置し、住居の北壁には第4号柱遺跡が、西壁には第2号柱遺跡が近接している。平面形は方形を呈し、遺構は東西-北東方向0.06m、北西-南東方向0.00mを測る。主軸方位は北東方向を向き、N-05°Eをとる。床面はやや軟弱で、平直に作られている。床面はないが、住居南東壁下の中土層部に長方形の浅い掘り込みをもつ。住居中央部に大きな土塊があるが、これは住居の覆土が崩壊する過程で倒壊されたものであり、本室柱部に伴うものではない。カマド(第5図)

に、佐沖北東沖中央のやや東寄り位置にあり、壁に対してほぼ南向の向きに傾り込んで構築されている。築造は、全長150m・幅110mを築る。壁及び築造部は築造部の東西は、黄白色土によって作られており、オマア内面は表面に良く焼けて赤色化している。

土上遺物(築100)は、土器片が少量出土しただけである。本築造部に伴うものは、オマア内から出土したNo.1とNo.3の土器断片だけである。No.1の壁に、本築造部の築造過程中に覆割された大形の土器内から出土している。

■ 第4号住居跡 (築100期、図面5)

調査区の東部に位置し、住居の西壁には第3号住居跡が、東壁には第3号住居跡が位置している。平面形は長方形を呈し、築造は東西方向に、24m、南北方向に、60mを築る。主軸方位は東西南方向を向き、N₁₀E₁₀°-Wをとる。東壁は比較的単純で、平壁に作られている。壁はやや斜めに立ち上がるが、住居後半の上部には崩落して緩やかになっている。壁溝は各壁下に見られるが、オマア右側の壁下には存在せず空切れている。オマア(築100期)は、住居東側のほぼ中央に位置し、壁に対してやや斜めの向きに傾り込んで構築されている。築造は、全長125m・幅100mを築る。壁は、西側とも築造部粘土を壁に貼り付けて作っている。築造部は北面より一段低くなっており、植込部は築造部よりそのまま斜めに立ち上がる。

土上遺物(築100・200期)は、土器と石子の層片がある。No.1・2の壁と築3の壁及びNo.4の壁は、オマア内よりまたまって出土したもので、築3の壁と築3の石子は壁土中から出土している。

■ 第5号住居跡 (築100期、図面6)

調査区の北東部に位置する。本築造部の西壁には第3号住居跡が、北面には第3号住居跡が位置している。平面形は長方形を呈し、築造は南西-北東方向に、75m、北西-南東方向に、64mを築る。主軸方位は南西方向を向き、N₁₀E₁₀°-Wをとる。東壁は比較的単純で、ほぼ平壁に作られている。住居中央部の床下には直径1.5m位の円形を呈する土器があり、いずれも壁土中に壁土が割割に見られる。床下と壁の上部は丁寧に構築されている。主軸方位は住居の対角線上に45度傾斜されている。壁はやや斜めに立ち上がり、各壁の上部は崩落により緩やかになっている。壁溝は各壁下に見られるが、住居オマア右側の壁下には存在せず空切れている。オマア(築100・140期)は、住居の北東部(南オマア)と南西部(西オマア)の2箇所が存在するが、東オマアから西オマアに作り替えられたものである。住居築造時に伴う西オマアは、本築造部のほぼ中央の位置にあり、壁に対してやや斜めの向きに傾り込んで構築されている。築造は、全長160m・幅130mを築る。壁は、西側とも築造部粘土を壁から貼り付けて作っている。築造部は北面より一段低くなっており、内面は良く焼けて赤色化している。南オマアは、佐沖北東沖中央のやや東寄りに位置し、壁に対してほぼ西向の向きに傾り込んで構築されている。築造部は中央に傾斜を受けており、築造部は築造部より一段高くほぼ水平にのびている。

土上遺物(築100・200期)は、壁土中より比較的多量の土器片が出土し、土器以外では壁土中より石製陶器(No.11)・石子(No.12)・釘(No.13)がそれぞれ1点ずつ出土している。

第6号住居跡（第16図、図説7）

調査区の南側に位置し、西側には第5号住居跡が連続している。調査区内で確認されたのは住居の南西コーナー部分だけであり、本住居跡の大部分は調査区外であるため、住居の全容は不明である。床面は比較的平坦で、平土に作られている。壁はやや斜めに立ち上がり、上平部の崩落により凹凸になっている。壁跡は、崩落でまた壊下のすべりにさらされる。

出土遺物は、土中より細分礫の土器片が散見したただけである。

第7号住居跡（第16図、図説7）

調査区の北東端に位置し、西側には第8号住居跡が連続している。調査区内で確認されたのは住居の南西端の角部コーナー部分だけであり、本住居跡の大部分は調査区外であるため、住居の全容は不明である。また住居跡上の大部分は、植木の落葉による積土を被っている。床面は比較的平坦で、平土に作られている。壁はやや斜めに立ち上がり、東端は調査区内の破壊した壊下には見られない。

出土遺物は、土中のより角礫層中の土器片が少量出土しただけである。

第8号住居跡（第17図、図説8・9）

調査区の北東部に位置し、北端には第1号縄文住居遺物、東端には第7号住居跡、南端には第5号住居跡が連続している。平面形は長方形を呈し、幅段は南西-北東方向に約2m、北西-南東方向に約2mを測る。土壌方位は北東方向を向き、N-67°Eと取る。床面は比較的平坦で、ほぼ平土に作られているが、壁かなを凸を有する。壁はやや斜めに立ち上がり、上平部は崩落により凹凸になっている。壁跡は、住居の各壁下に見られるが、北東壊下のカマド付近から東側壊下の一帯にかけては存在せず埋没している。住居内からは土壌が土器片散見されているが、カマド西の北壁下に位置する遺構したまつの土壌はいわゆる灰下土層で、1層には灰層が認められる。カマド石製の住居東端隅一帯（掘削後に設置するものは、その位置や形態から貯蔵穴と考えられる。カマド(西は図)は、住居北東部中央のやや東寄りに位置し、壁に対してほぼ直角の向きに掘り込んで構築されている。壁はなく、掘削部に掘り込みをもちたず床面と同一の面である。掘削部は遺構部より一階高く、やや斜めに立ち上がっている。カマド西からは灰層に近い土器が多く出土し、粘土土器の壁が壁に垂って覆えられており、粘土の壁にははららの小形礫が混れられ、その壁方にははららの灰が粘り着いたような状態で出土している。

出土遺物(第27・28・29図)は、カマド西やカマド周辺及び住居周囲の南西面上より、東部に近い多くの土器や石製品と鉄製品が出土しており、良好な一級資料である。土器器は、器(No.1・No.3)、小形礫(No.5)、倉付器(No.4)、仏門器(No.2)、瓶(No.6)、埴(No.7~11)がある。煎茶器は、埴(No.10~26)と高台付器(No.27)があるが、埴はすべて南紀企業製の製品である。石製品は、燧石器の砥石(No.29)が土器付住居周囲の敷土より出土している。鉄製品は、鏝(No.28)と刀子(No.30・31)があり、鏝は住居東端コーナー部の壁面に貼り付いた状態で出土し、刀子はNo.30が住居北西コーナー部付近の灰層近くより、No.31が住居南西側の灰層直上より出土している。

2. 竪穴柱建物跡

第1号竪穴柱建物跡（第19図）

調査区の北端に位置し、南側には第8号住居跡が、南東側には第7号住居跡が延びている。調査区内では一部の柱穴しか検出されなかったため、本建物跡の全容は不明である。第2号溝跡及び第8号住居跡の一部が重複している。切り合い関係は第2号溝跡よりも古く、第8号住居跡との重複関係は明らかにならなかった。

建物の平面形状は、北東方向か北西方向のどちらかかわからないが、その向きは竪穴式住居跡とは別けて方向である。むしろは北東向き、柱心間は調査区内では先行・柱心とも約2.0mを測る。柱穴は、いずれも直径約60cmの円形をなし、深さは40cm～70cmある。竪土は、房褐色土ではみられず文化砂土を露呈している。赤土遺物は、柱穴の竪土のより上加縁の小破片がごく少量出土しただけである。

本建物跡の時期は、第2号溝跡に切られていることや柱穴遺土と赤土土器の状態から古代のものと考えられ、おそらく調査区内で検出された竪穴式住居跡のある時期に作るものであろう。

3. 土 器

第1号土器（第20図）

調査区の北東部に位置する。内縁には第1号溝跡と第1号住居跡が延びている。平面形はコーナー状の丸いやや楕圓の長方形をなし、幅縁は長径18.0cm・短径10.0cmを測る。長径方向は、北西～南東方向に向き、底「凹」型をとる。腹はやや斜めに立ち上がり、南縁にはほぼ半蓋であるが蓋縁方向の突起がやや高くなっている。土器遺物は、土器片が数片出土しただけである。

時期は、腹中に瓦粒を露呈含むことから、中世以降のものと考えられる。

第2号土器（第20図）

調査区の北端に位置する。本跡には第8号住居跡と第1号住居跡の柱建物跡が延びている。平面形は方形をなし、幅縁は東西方向12.0cm・南北方向12.0cmを測る。底は斜めに立ち上がり、裏面は平底である。赤土遺物は、土器片が少量出土しただけである。

時期は、腹土の状態や赤土器より古代のものと考えられる。

4. 溝 跡

溝跡は、調査区内より多数検出されているが、調査の第1号溝跡は赤礫石を多量に含む浅層半臥溝のものである。北側の第2号溝跡(第21図)は、層土中に瓦礫石を含むことから中世以降のものと考えられる。断面は断面が「U」の字状をなし、穴縁的に掘られているようである。竪土の観察では、壁面に水が流れていたような痕跡は認められず、排水のための空堀であった可能性が高いと思われる。赤土遺物は、土器片の破片が少量出土しただけであり、本溝跡に作るものと考えられる遺物は、まったく出土していない。

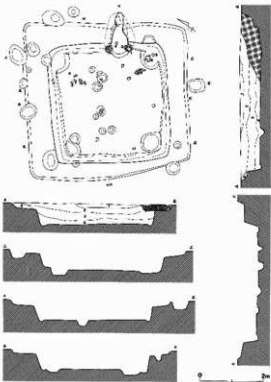


圖 4 圖 1 号住居跡

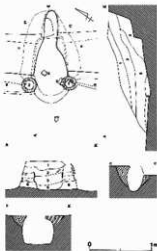


図5図 第1号改良法カマド

第1号改良法カマド土層説明

- 第1層：改良層の上層（ローム粘土・流石層）を構築する。乾燥・しまりともない。
- 第2層：改良層の上層（ローム粘土・流石層）を均一に混合し、乾燥・しまりともない。
- 第3層：改良層の上層（改良層の粘土層・流石層）の下層に、流石ブロックを構築する。乾燥・しまりともない。
- 第4層：改良層の上層（ローム粘土層）に、流石層を構築する。乾燥・しまりともない。
- 第5層：改良層の上層（改良層の上層）・流石層の下層を構築する。乾燥・しまりともない。
- 第6層：改良層の上層（ローム粘土・流石粘土・流石層）を均一に混合し、乾燥・しまりともない。
- 第7層：改良層の上層（改良層の上層）を多量に、乾燥・しまりともない。

第2号改良法土層説明

- 第1層：改良層の上層（改良層の上層）を構築する。乾燥・しまりともない。
- 第2層：改良層の上層（改良層の上層）を構築する。乾燥・しまりともない。
- 第3層：改良層の上層（ローム粘土層）に、流石層（流石層）を構築する。乾燥・しまりともない。
- 第4層：改良層の上層（ローム粘土・流石層）を多量に、流石ブロック・改良層を構築する。乾燥・しまりともない。
- 第5層：改良層の上層（改良層の上層）を構築する。乾燥・しまりともない。

第3号改良法土層説明

- 第1層：改良層の上層（ローム粘土層）を均一に混合し、乾燥・しまりともない。
- 第2層：改良層の上層（ローム粘土・流石層）を構築する。乾燥・しまりともない。

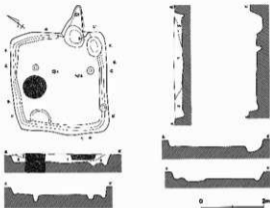


图6图 第2号住居跡

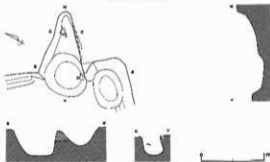
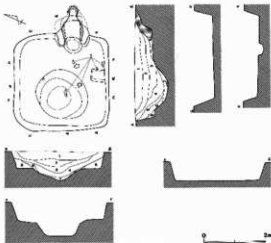
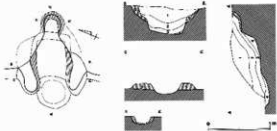


图7图 第2号住居跡カマド



第8図 第3年性幼虫



第9図 第3年性幼虫カマド

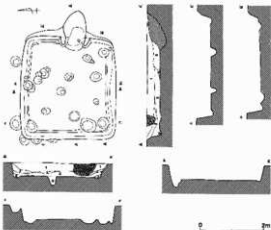


図10 第4号住居跡

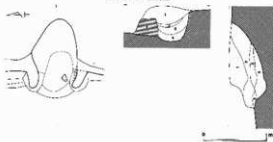


図11 第4号住居跡カマド

第3号住居用地上建物の説明

- 第1層：寝間室上層（ローム断り・ロームコア充填構造の、柱間・しまりともない）
- 第2層：寝間室上層（ローム断り・ロームコア充填構造の、柱間、柱間・しまりともない）
- 第3層：寝間室上層（ローム断り構造の、柱間断り・ロームコア充填構造の、柱間・しまりともない）
- 第4層：浴室上層（ローム断り構造の、柱間断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第5層：浴室上層（ローム断り・ロームコア充填構造の、柱間・しまりともない）
- 第6層：階段上層（ローム断り・ロームコア充填構造の、柱間・しまりともない）
- 第7層：階段上層（ローム断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第8層：階段上層（ローム断り・ロームコア充填構造の、柱間・しまりともない）

第3号住居用地上建物の説明

- 第1層：寝間室上層（ローム断り・ロームコア充填構造の、柱間、柱間・しまりともない）
- 第2層：浴室上層（ローム断り構造の、柱間断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第3層：浴室上層（柱間断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第4層：浴室上層（柱間断り構造の、柱間断り・ローム断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第5層：浴室上層（柱間断り構造の上層に、ロームコア充填構造の一箇所、柱間はなく、しまりを含む）

第4号住居用地上建物の説明

- 第1層：寝間室上層（ローム断り・鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第2層：浴室上層（ローム断り構造の、柱間、柱間・しまりともない）
- 第3層：浴室上層（ローム断り・鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第4層：浴室上層（ローム断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第5層：浴室上層（柱間断り構造の一に、ローム断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第6層：浴室上層（ローム断り構造の、柱間・しまりともない）

第4号住居用地上建物の説明

- 第1層：浴室上層（ローム断り・鋼鉄断り・鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第2層：浴室上層（鋼鉄断り断り構造の、柱間断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第3層：浴室上層（鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第4層：浴室上層（ローム断り・鋼鉄断り・鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第5層：浴室上層（鋼鉄断り・鋼鉄断り構造の、柱間はなく、しまりを含む）

第5号住居用地上建物の説明

- 第1層：浴室上層（ローム断り構造の、柱間断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第2層：浴室上層（ローム断り・鋼鉄断り・鋼鉄断り構造の、柱間、柱間・しまりともない）
- 第3層：浴室上層（鋼鉄断り断り構造の、ローム断り・鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第4層：浴室上層（ローム断り構造の、柱間断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第5層：浴室上層（ローム断り・鋼鉄断り構造の、柱間はなく、しまりを含む）
- 第6層：浴室上層（ローム断り・鋼鉄断り・鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第7層：浴室上層（ローム断り・鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）

第5号住居用地上建物の説明

- 第1層：浴室上層（鋼鉄断り断り構造の、ローム断り・鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第2層：浴室上層（ローム断り・鋼鉄断り・鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第3層：浴室上層（鋼鉄断り・鋼鉄断り・鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第4層：浴室上層（鋼鉄断り・鋼鉄断り・鋼鉄断り構造の、柱間・しまりともない）
- 第5層：浴室上層（鋼鉄断り断り構造の上層に、鋼鉄断り構造の、柱間はなく、しまりを含む）

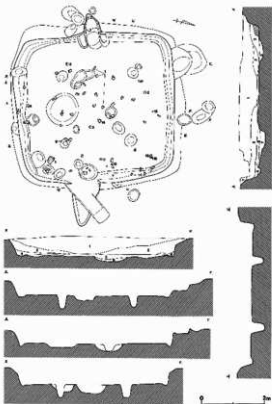


圖125 第5号镜形制

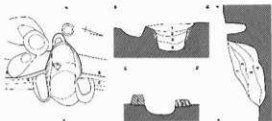


図13圖 第5号仕用鋳造力マド

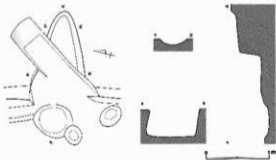
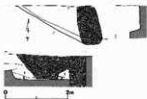


図14圖 第5号仕用鋳造力マド



第15図 第6号住居跡



第16図 第7号住居跡

第7号住居跡土層説明

- 第1層：埴原色土層（ローム粘土・ロームブロックを均一に、焼瓦片を散見含む。焼物・しまりともない）
 第2層：埴原色土層（ローム粘土が多数含む。焼物・しまりともない）

第8号住居跡土層説明

- 第1層：埴原色土層（ローム粘土・埴原色土を均等に含む。焼物・しまりともない）
 第2層：埴原色土層（ローム粘土を均一に、埴原色土を多数含む。焼物・しまりともない）
 第3層：埴原色土層（ローム粘土・ロームブロックを均一に含む。焼物・しまりともない）
 第4層：埴原色土層（ローム粘土が多数に含む。焼物・しまりともない）
 第5層：埴原色土層（ローム粘土を均一に、ロームブロックを多数含む。焼物・しまりともない）
 第6層：埴原色土層（ローム粘土・ロームブロックを多数含む。焼物・しまりともない）

第9号住居跡土層説明

- 第1層：埴原色土層（埴原色・ローム粘土を均等に含む。焼物・しまりともない）
 第2層：埴原色土層（埴原色を多数に含む。焼物・しまりともない）
 第3層：埴原色土層（ローム粘土・ロームブロックを多数含む。焼物・しまりともない）
 第4層：埴原色土層（ローム粘土を均一に、ロームブロックを多数含む。焼物・しまりともない）

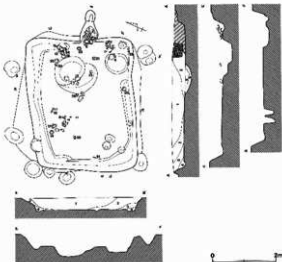


图17图 第8号位层群



图18图 第8号位层群カマド

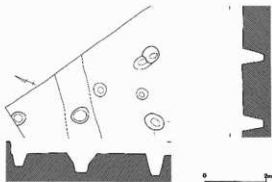


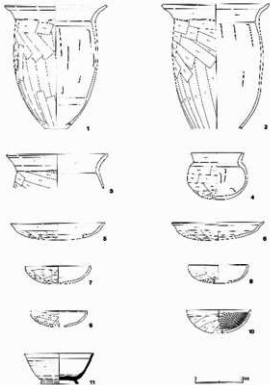
图19图 第1号铜立纹陶钵



图20图 土 甗



图21图 第2号陶甗



第22图 第1号西周遗址出土陶器



图23图 第2号位清静出土土器



图24图 第3号位清静出土土器



图25图 第4号位清静出土土器



图24 图5号住居跡出土土器

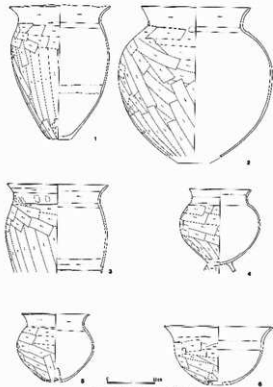


图27 第8号住居跡出土土器(1)

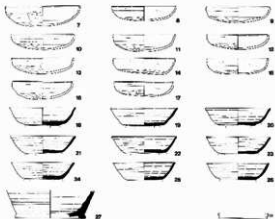


图23 第3号住居跡出土土器(2)



图24 住居跡出土石器-铁制品

表 2 号生建築校士土質調査表

No.	調査地	法 量	取割・成形手法の特徴	製割手法の特徴	取 土・色 調	備 考
1	地蔵池 奥内池 池	1層(21.4) 層高 4.5 底面径7.8	取割は内側面みに限る。円筒型に於て外記する。取割面は中央部削り、両側面は削り込み、取割は内側面のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	白色系・黄褐色 内側→黄褐色	約1/1
2	池	円筒型削 (20.4m)	削り面は内側面みに限る。円筒型に於て中央部削り、両側面は削り込み、取割は内側面のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	白色系・黄褐色 内側→黄褐色	1層削り内 削り。
3	池	円筒型削 (7) 層高 3.4	円筒型に於て内側面みに限る。取割は削り、中央部のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	黄褐色・白色系 内側→黄褐色	約1/1
4	池	円筒型削 (3.8) 層高 3.8	円筒型に於て中央部削り、両側面は削り込み、取割は内側面のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	白色系・黄褐色 内側→黄褐色	約1/1、内側面 削り、取割面削り。

表 3 号生建築校士土質調査表

No.	調査地	法 量	取割・成形手法の特徴	製割手法の特徴	取 土・色 調	備 考
1	池	円筒型削 (20.4m)	削り面は内側面みに限る。円筒型に於て中央部削り、両側面は削り込み、取割は内側面のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	白色系・黄褐色 内側→黄褐色	1層削り内 削り。
2	池	円筒型削 (3.34) 層高 3.34	削り面は内側面みに限る。取割は削り、中央部のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	黄褐色・白色系 内側→黄褐色	約1/1
3	池	円筒型削 (3.3) 層高 3.3	削り面は内側面みに限る。取割は削り、中央部のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	白色系 内側→黄褐色	円筒型削り 削り。

表 4 号生建築校士土質調査表

No.	調査地	法 量	取割・成形手法の特徴	製割手法の特徴	取 土・色 調	備 考
1	池	円筒型削 (20.4) 層高 7 底面径 4.4	削り面は内側面みに限る。円筒型に於て中央部削り、両側面は削り込み、取割は内側面のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	白色系・黄色系 内側→黄褐色	約1/1 取割面削り 削り。
2	池	円筒型削 (20.4m)	削り面は内側面みに限る。円筒型に於て中央部削り、両側面は削り込み、取割は内側面のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	白色系・白色系 内側→黄褐色	1層削り内 削り。
3	池	1層(20.4) 層高 2.5	円筒型に於て中央部削り、両側面は削り込み、取割は内側面のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	白色系・黄褐色 内側→黄褐色	約1/1
4	池	円筒型削 (24.2)	削り面は内側面みに限る。円筒型に於て中央部削り、両側面は削り込み、取割は内側面のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	白色系・黄色系 内側→黄褐色	約1/1
5	池	円筒型削 (22.4)	削り面は内側面みに限る。円筒型に於て中央部削り、両側面は削り込み、取割は内側面のみ。	円筒型の内側面のみ削り、取割面は削り込みのみ。	白色系・黄褐色 内側→黄褐色	約1/1

種 類	品 名	形状・成形手段の種類	成形手段の種類	組立・色調	備 考	
14	甲	口部は、 高さ 2.8	側面は内折しながら開き、 口縁部はゆるまじょうに成 く。底面はやや広がり、	口縁部内折型コウチア。底 面はゆるまじょう、トキケズ リ。内折せず。	白色紙 内折一色調褐色	底面。
15	甲	口部は、 高さ 2.4	側面は内折しながら開き、 口縁部はやや外折する。底 面は丸みを帯びる。	口縁部内折型コウチア。底 面はゆるまじょう、トキケズ リ。内折せず。	白色紙 内一色調褐色	底面。
16	甲	口部は、 高さ 2.8	側面は内折しながら開き、 口縁部はゆるまじょうに成 く。底面は丸みを帯びる。	口縁部内折型コウチア。底 面はゆるまじょう、トキケズ リ。内折せず。	白色紙 内折一色調褐色	底面。 底面はやや 凹んでいる。
17	甲	口部は、 高さ 3.1	側面は内折しながら開き、 口縁部はゆるまじょうに成 く。底面は丸みを帯びる。	口縁部内折型コウチア。底 面はゆるまじょう、トキケズ リ。内折せず。	白色紙 内折一色調褐色	ほぼ底面。
18	甲	口部は、 高さ 3.4 底面 7.1	口部の底面、側面は内折さ るに開き、口縁部は中折 れする。底面は平底を呈す。	内折面とも折れせず。底面 はほぼ鉛直な傾きの後、内折 面傾へたケズ。	白色紙折紙 内折一色調褐色	ほぼ底面。 口部の底面 は凹み、
19	甲	口部は、 高さ 3.8 底面 6.5	口部の底面、側面はやや内 折れに開く。底面は平底を 呈する。	内折面とも折れせず。底面 はほぼ鉛直な傾きの後、内折 面傾へたケズ。	白色紙折紙 内折一色調褐色	ほぼ底面。 口部の底面 は凹み、
20	甲	口部は、 高さ 3.7 底面 7.4	口部の底面、側面はやや内 折れに開く。口縁部は外 折れに開く。底面は平底。	内折面とも折れせず。底面 はほぼ鉛直な傾きの後、内折 面傾へたケズ。	白色紙折紙 内折一色調褐色	ほぼ底面。 口部の底面 は凹み、
21	甲	口部は、 高さ 3.8 底面 7.4	口部の底面、側面はやや内 折れに開く。口縁部は外 折れに開く。底面は平底を呈す。	内折面とも折れせず。底面 はほぼ鉛直な傾きの後、内折 面傾へたケズ。	白色紙折紙 内折一色調褐色	ほぼ底面。 口部の底面 は凹み、
22	甲	口部は、 高さ 3.4 底面 8.3	口部の底面、側面はやや内 折れに開く。底面は平底 を呈する。	内折面とも折れせず。底面 はほぼ鉛直な傾きの後、内折 面傾へたケズ。	白色紙折紙 内一色調褐色	ほぼ底面。 口部の底面 は凹み、
23	甲	口部は、 高さ 3.4 底面 7.7	口部の底面、側面はやや内 折れに開く。口縁部は外 折れに開く。底面は平底を呈す。	内折面とも折れせず。底面 はほぼ鉛直な傾きの後、内折 面傾へたケズ。	白色紙折紙 内一色調褐色	ほぼ底面。 口部の底面 は凹み、
24	甲	口部は、 高さ 3.4 底面 7.8	口部の底面、側面はやや内 折れに開く。底面は平底 を呈する。	内折面とも折れせず。底面 はほぼ鉛直な傾きの後、内折 面傾へたケズ。	白色紙折紙 内折一色調褐色	ほぼ底面。 口部の底面 は凹み、
25	甲	口部は、 高さ 3.7 底面 7.1	口部の底面、側面はやや内 折れに開く。口縁部は外 折れに開く。底面は平底。	内折面とも折れせず。底面 はほぼ鉛直な傾きの後、内折 面傾へたケズ。	白色紙折紙 内折一色調褐色	ほぼ底面。 内折面に若干 な凹みあり、
26	甲	口部は、 高さ 3.4 底面 7.3	口部の底面、側面はやや内 折れに開く。底面は平底 を呈する。	内折面とも折れせず。底面 はほぼ鉛直な傾きの後、内折 面傾へたケズ。	白色紙折紙 内折一色調褐色	ほぼ底面。 口部の底面 は凹み、
27	甲	口部は、 高さ 3.4 底面 7.3	口部の底面、側面はやや内 折れに開く。底面は平底 を呈する。	内折面とも折れせず。底面 はほぼ鉛直な傾きの後、内折 面傾へたケズ。	白色紙・黄色紙 内折一色調褐色	ほぼ底面。 口部の底面 は凹み、

第IV章 新宮遺跡(D地点)の発掘調査

第1節 遺跡の概要

本遺跡は、「新宮遺跡発掘調査」の概要(以下略) (2)遺跡に該当する遺跡の歴史文化財形成域である。遺跡は、古墳群(古墳域)の中心部をなす単に在地上の土壌層遺跡に定直し、古墳の南西側遺跡A地点の南西約500mにあたる(東海地方)本遺跡のコーナー部分を中心として位置している。

本遺跡は、旧石器時代(A地点)・縄文時代(B地点)・縄文前期後段(C・D地点)に行っており、すでに4地点の小規模で部分的な発掘調査が実施されており(敷地内)、縄文時代前期後半と古墳時代中・後段-奈良時代の発掘調査を主体とする遺跡であることが、ある程度明らかになっている。特に縄文時代前期後半の本遺跡は、本遺跡の北東部の500mに位置する古井(遺跡(宮井1886)や900mに位置する新宮遺跡(新宮1886)に劣らない大規模な遺跡集積と推測されるもので、河内湖に近接してこれらの大規模遺跡集積がまつばりしている当該地域の発掘のやり方が大変注目されている。

これまでに実施したA-D地点の発掘調査で検出された主な遺物は、古墳時代の埴輪、河内湖沿岸遺跡1区、土層約200mである。本遺跡におけるこれらの遺物の遺存状況は、新宮遺跡と同様に比較的良好なものが多い。

縄文時代の遺物は、4地点で約1000個と上述200m以上が検出されており、そのほとんどが中期の無文式土器-加賀河内式土器に属するものである。これらの遺物は、A1地点の調査(以西略記)で検出された比ノ内遺跡集積(西米1881)より約2、A2地点の調査(以西略記)では全く検出されておらず、またB1地点の調査(中央部から遺物の長い区間で発掘部が検出されていないことから)、A1・B1・C・D地点の調査(北)に際した内側の発掘約100mの範囲を拡張とし、約200m-250mの範囲内に北辺部が同様に遺物分布する大規模遺跡集積と推定される。この遺物集積の具体的な詳細については、今後の調査と発掘を部分の発掘調査を得たなければならぬが、縄文時代までの調査によれば、無文式土器(中期)にA1地点の調査(中央部からB地点の調査)、比較的の小規模と推定される集積が内側し、加賀河内式(前期)に属する集積が外側し、遅くとも加賀河内式(中期)段階には大規模な遺物集積を形成してゾーンを形成し、そして加賀河内式(中期)のうちには集積が内側し(遅くとも)傾向するようである。本遺跡のこのような集積の配置は、新宮遺跡や古井(遺跡)と概ね同様であり、高層するまつの大規模遺物集積の配置に関連した種別が認められ、これらの集積の発掘・発掘が当該地域における中期後半の社会形成を反映していることが予想される。

古墳時代-奈良時代の遺物は、復元(中期)・河内湖沿岸遺跡1区・土層2区があり、すべてD地点で検出されている。古墳時代の遺物は、本遺跡の北東部に隣接する新宮遺跡や河内湖の土ノ内遺跡及び南側の上高下高遺跡に隣接する集積帯の一部と考えられるもので、南側の新宮遺跡と推定される河内湖沿岸遺跡が本遺跡で検出されていることは注目される。奈良時代の遺物は、本遺跡の北側に隣接する南宮遺跡から内側の比ノ内遺跡に近する集積帯の一部と考えられるものである。

今注目するD地点は、本遺跡の北東部付近に位置している。調査区(約)500m、古墳時代の発掘(約)4・河内湖沿岸遺跡1区、奈良時代の発掘(約)50mと河内湖沿岸の土層2区である。縄文時代の遺物は、調査区の全域に分布しているが、本遺跡は調査区中央部から南側に集中しており、他地点の埋蔵から見て、本遺



図30 調査道路A～D地点全体図

第2節 古墳・奈良時代の遺構と遺物の概要

1. 聖武式体遺跡（第32～38区、第39～41区）

白鳥点では、調査区内より古墳時代の住居跡3軒と奈良時代の住居跡4軒が検出されている。これらの住居跡は一般的に掘り込みが深く、概して遺構の遺存状態は良好であるが、古墳時代中期の遺構として1軒だけ突出したと第7号住居跡のように掘り込みが深く、住居の床面がハードローム層上の黒褐色土中に築造されているものもある。

古墳時代の住居跡は、中層1軒（第7号住居跡）と後期4軒（第32・33・34・35号住居跡）であり、これらは調査区中央部に集中しているが、特に後期の住居跡は、近接して掘込に突入している。中期の第7号住居跡（西組別）は、450cm×600cmの北西方向に長軸をもつ方式を呈し、住居の対角線上に比較的地いまい本上り穴をもつ。住居内に石室穴やカマドの遺構は見られず、おそらく住居北西側の土坑穴裏の掘り出し位置（掘込内）に炉を有していたものと推定される。出土遺物は、南西コーナー部の床面より発見した状態で白粉土（黄砂質）が盛土しているが、この他に後述式墓の口縁部が近接的に深く掘り込みの状況も見られる。赤住居跡の時期は、カマドを持たないものの、出土品より和瓦式後々に属する可能性が考えられる。

後期の住居跡は、いずれも築設部からの厚さが20cm程度あり、遺存状態は極めて良好である。これらの住居跡は、1メートル程度の比較均一な土質を用い、住居北西方向の隅や奥部にカマドをもつ。カマドは、陶器製が殆ど掘り込まない形跡のもので、コームブロックを基礎とする積層褐色土を用いて構築しているものが多いが、第8号住居跡のカマドは他の住居跡と異なり、単一級式褐色粘土を用いている。また、第8号住居跡では土室の壁と構える部分に、縄文時代中期後葉の陶器土器の調子（第4区群）を土間に施して、炉の構造に使用している。上り穴は、西部の比較的地いまい本上り穴であるが、掘込や深さは様々である。石室穴は、第8号住居跡と第9号住居跡に見られるが、いずれも規模が小さく浅いものである。構造は、第8号住居跡と第9号住居跡に見られるが、第8号住居跡は全周寸ず住居の北東面コーナー部で発見されている。

出土遺物は、カマド内やその周囲の床面上より土器が出土している。土器類は、壺・甕・入形鉢・杯・埴・甕などが出土しているが、第8号住居跡と第9号住居跡では武烈の住居跡に一般的を特徴する「積層埴」が確認に少なく、かわりに器内が厚く窪み作りや杯や甕が多く見られる。また、第8号住居跡では、住居出土の上層とあまり時間差の認められないこれらの器内作りの杯や甕が、大形類とともにまとまって住居の南東部の掘込土中に投げ込まれており注目される。煎瓦類は、第8号住居跡で煎瓦器の破片が1点出土しているだけである（第3区群）。これらの土器は、すべて先石式に属するものであるが、第8号住居跡は第8号住居跡や第9号住居跡に比べて、若干新しい形相が窺える。この後では、第9号住居跡で焼成の土製品と白土が1点ずつ出土している（第3区群）。

奈良時代の住居跡は、調査区北端で4軒が遺留して検出されているが、第3号住居跡と第9号住居跡は遺構の大半が調査区外に位置するため、その名称は不詳である。第3区群は、第1号住居跡と第2号住居跡に認められ、第3号住居跡が第1号住居跡を包摂している。これらはいずれも4区位の規模で、住居の主軸を北東方向にとり、カマドは住居北東側に位置しているが、壁の中気路よ

く距離ローター型窓の設置に、壁を塗り込んで遮断される特徴をもつ。住戸内の施設はあまり見られないが、第1号住戸跡では明窓が全廃し、第4号住戸跡ではカマドの右側に比較的深い遮断風の壁を認められる。

土壌遺物は、各住戸跡とも比較的少なく、土器類と第4号住戸跡跡から出土した磁石(第42図)がある。土器類は、縄・文(1)期・瓦・坪がある。特に、第2号住戸が跡から出土しており、口縁部上半にはコナガによる平面的な段差をもち、頂部上半部方向・側部下半部方向のヘクサズリが施されるものである。この磁石は、第4号住戸跡跡から出土しており、器底の面を照らす照明の光線が、口縁部の外反が強く洞部が強く屈る形跡のものである。これは、第2号住戸跡跡と第4号住戸跡跡から出土している。これらには磁石の種類がJc₁-Jc₂を測るものであるが、比較的磁石の強いものが多い。また、第4号住戸跡跡では口縁部跡がJc₂代のやや小ぶりで器底が強く屈平なものも認められる。坪は、各住戸跡から出土しており、口縁部が強く屈した外反が丸みを帯びる北式器底のものが多く、第2号住戸跡跡と第3号住戸跡跡の坪に比べて第3号住戸跡跡と第4号住戸跡跡の坪は、器底が若干偏平化し、僅かなヘクサズリが口縁部跡まで入っていないなど新しい特徴が認められる。また、第1号住戸跡跡と第4号住戸跡跡では、磁石の発見も認められる。これらの土器類は、各住戸跡の磁石から4種とも異なる土器類群に属するものと考えられるが、このうちの第1号住戸跡跡と第3号住戸跡跡が第1紀第1回下段、第3号住戸跡跡と第4号住戸跡跡が第1紀第2回下段に位置付けられよう。これら4種の住戸跡跡は、その位置した位置関係や遺物関係及び出土層から見て、すべてが同時に存在していたものではなく、おそらく第1号住戸跡跡→第2号住戸跡跡→第4号住戸跡跡→第3号住戸跡跡の順に、調査区内では発達していったと考えられる。

2. 円形遺構遺構(第42図)

第9号住戸跡跡の南側に位置して、再検出されている。平面型は、4.00m×4.74mの円形を呈し、周壁は、40cm-50cm程度の比較的均整のとれた形造で、全周している。壁はJc₂所成あり、内側に広い平面を画示している。壁は、住戸跡跡と類似した土質色土の単一層である。周壁に築かれた内側や外側には、本遺構と異なるようなドットはまったく存在しない。出土遺物は、壁土中より土器片がごく少量出土した程度である。本遺構の時期は、覆土の状況より古墳時代前期のものと考えられる。

古墳-新島時代住戸跡-1の表

住戸跡	形	期	壁	壁土	土器類	カマド	遺	種	遺	方	新	次	時
1号	長	方	形	42cm×38cm	5cm	N-01	×	×	×	×	×	×	新
2号	長	方	形	55cm	2-17	×	×	×	×	×	×	×	新
3号	不	定	形	64cm	2-02	×	×	×	×	×	×	×	新
4号	不	定	形	34cm×28cm	3cm	H-12	×	×	×	×	×	×	新
5号	方	形	33cm×31cm	3cm	H-01	×	×	×	×	×	×	×	新
6号	方	形	46cm×46cm	4cm	H-17	×	×	×	×	×	×	×	新
7号	長	方	形	45cm×40cm	3cm	2-03	×	×	×	×	×	×	新
8号	方	形	35cm×30cm	3cm	N-02	×	×	×	×	×	×	×	新
9号	方	形	34cm×36cm	3cm	X-01	×	×	×	×	×	×	×	新

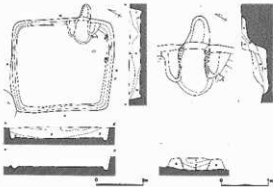


图32 图1号位原种

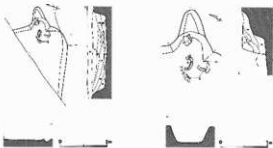


图33 图2号位原种

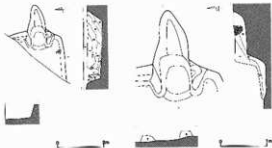


图34 图3号位原种

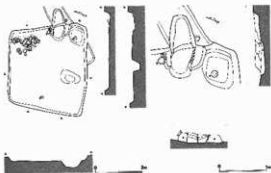


图35 图4号位原种

第1号住居用土庫説明

第1層：暖房用土層（ローム断子・敷土断子を均一に、小石を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第2層：床基礎用土層（ローム断子を多量に、小石を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第3層：防潮土層（ローム断子・ロームブロックを敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第1号住居用地下室土庫説明

第1層：防潮用土層（ローム断子を均一に、敷土断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第2層：床基礎用土層（敷土断子を多量に、断熱・しまりともない。）

第3層：防潮用土層（敷土断子を均一に詰め、断熱・しまりともない。）

第4層：暖房用土層（ローム断子・敷土断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第5層：断熱用土層（敷土断子を均一に、断熱断子・ローム断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第6層：防潮用土層（ローム断子・ロームブロックを多量に詰め、断熱はなく、しまりを保つる。）

第2号住居用土庫説明

第1層：防潮用土層（ローム断子・敷土断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第2層：断熱用土層（ローム断子を均一に、ロームブロックを敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第3層：断熱用土層（ローム断子を均一に、断熱断子・敷土断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第4層：断熱用土層（断熱用断子ブロック・敷土断子を均一に詰め、断熱・しまりともない。）

第5層：断熱用土層（ローム断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第6層：断熱用土層（ローム断子を均一に詰め、断熱・しまりともない。）

第7層：断熱用土層（ロームブロックを均一に詰め、断熱はなく、しまりを保つる。）

第2号住居用地下室土庫説明

第1層：断熱用土層（ローム断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第2層：断熱用土層（ローム断子を均一に詰め、断熱・しまりともない。）

第3層：断熱用土層（ローム断子・敷土断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第4層：断熱用土層（ローム断子・敷土断子を均一に、断熱断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第3号住居用土庫説明

第1層：断熱用土層（ローム断子・小石を均一に詰め、断熱・しまりともない。）

第2層：断熱用土層（ローム断子を均一に、ロームブロックを敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第3層：断熱用土層（ローム断子を均一に詰め、断熱・しまりともない。）

第4層：断熱用土層（ローム断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第5層：断熱用土層（ローム断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第6層：断熱用土層（ローム断子・敷土断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第3号住居用地下室土庫説明

第1層：断熱用土層（ローム断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第2層：断熱用土層（ローム断子を均一に、敷土断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第3層：断熱用土層（敷土断子を多量に詰め、断熱・しまりともない。）

第4層：断熱用土層（ローム断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第5層：断熱用土層（ロームブロックを均一に詰め、断熱はなく、しまりを保つる。）

第4号住居用地下室土庫説明

第1層：断熱用土層（ローム断子を均一に、敷土断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第2層：断熱用土層（敷土断子を多量に詰め、断熱・しまりともない。）

第3層：断熱用土層（ローム断子・敷土断子を均一に、断熱断子を敷き詰め、断熱・しまりともない。）

第4層：断熱用土層（断熱用断子ブロック・ロームブロックを均一に詰め、断熱はなく、しまりを保つる。）



图 1 号纹陶片

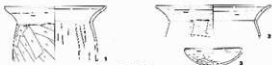


图 2 号纹陶片



图 3 号纹陶片



图 4 号纹陶片

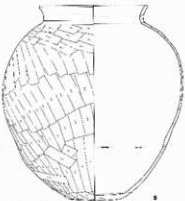
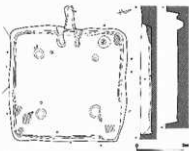


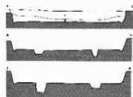
图 26 图 殷周时代信阳楚出土土器



第29号位層の土層説明

第1層：暗褐色土層（砂石含有）
 ①、砂—砂質土の暗褐色
 色、粘性—しまりともない。

第2層：暗褐色土層（砂—砂質土
 含有）①、砂—砂質土の
 暗褐色の色、粘性—し
 まりともない。



第30号位層の土層説明

第1層：暗褐色土層（砂—砂質土含有）①、暗褐色の土
 層、粘性—しまりともない。

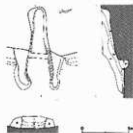
第2層：暗褐色土層（砂—砂質土含有）①、暗褐色の土
 層、粘性—しまりともない。

第3層：暗褐色土層（砂—砂質土含有）①、暗褐色の土
 層、粘性—しまりともない。

第4層：暗褐色土層（砂—砂質土含有）①、暗褐色の土
 層、粘性—しまりともない。

第5層：暗褐色土層（砂—砂質土含有）①、暗褐色の土
 層、粘性—しまりともない。

第6層：暗褐色土層（砂—砂質土含有）①、暗褐色の土
 層、粘性—しまりともない。



第31号位層

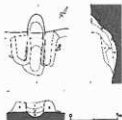


図24 藤原寺遺跡



藤原寺遺跡出土層説明

- 第1層：基礎地土層（ローム粘土・砂子）の中間層部分。焼物・しまりともない。
- 第2層：基礎地土層（砂・土質砂子・砂礫層）の、流石瓦子基礎部分。焼物・しまりともない。
- 第3層：基礎地土層（ローム粘土層）の、小瓦を敷き置いた。焼物・しまりともない。
- 第4層：基礎地土層（ローム粘土層）の、焼物・しまりともない。
- 第5層：基礎地土層（砂・土質砂子）の、焼物・しまりともない。
- 第6層：基礎地土層（砂・土質砂子）の、焼物・しまりともない。

藤原寺遺跡跡のヤマト土層説明

- 第1層：基礎地土層（ローム粘土・粘土質砂子層）の部分。焼物・しまりともない。
- 第2層：埋め残土層（砂・土質砂子・埋め残土層）の部分。焼物・しまりともない。
- 第3層：基礎地土層（ローム粘土層）の、粘土質砂子層部分。焼物・しまりともない。
- 第4層：基礎地土層（粘土質砂子層）の、焼物・しまりともない。
- 第5層：基礎地土層（ローム粘土層）の、焼物・しまりともない。
- 第6層：基礎地土層（ローム粘土層）の、焼物・しまりともない。



第9号住居跡の上層説明

- 第1層：同地元の層（10—14号子午線位置の、断面・北壁面とも参照。）
- 第2層：埋蔵物盛込層（10—14号子午線より北、北西向きに敷設された、断面・北壁面とも参照。）
- 第3層：貯蔵物盛込層（10—14号子午線位置の、断面・北壁面とも参照。）
- 第4層：埋蔵物盛込層（10—14号子午線位置の、断面・北壁面とも参照。）



第40図 第9号住居跡

第9号住居跡のサマ下土層説明

- 第1層：埋蔵物の土層（10—14号子午線位置の、断面・北壁面とも参照。）

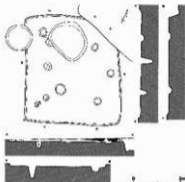


图41图 图7号住居跡

图7号住居跡出土品説明

图1層：銅鏡出土層（M-4坑子一
層土層子中埋藏品也。約
計・1.5センチメートル。）

图2層：銅鏡出土層（M-4坑子
中約・1.2センチ、長さ・1.2
センチメートル。）

图3層：銅鏡出土層（M-4坑子中
埋藏品也。約計・1.5センチ
メートル。）

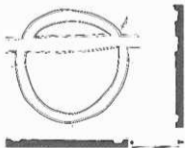


图42图 图1号住居跡遺物

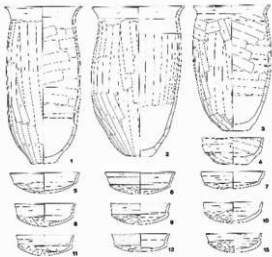


图43 古代陶器



图44 古代陶器

图45 古代时代性陶器出土图(1)



圖7 寺庄遺跡

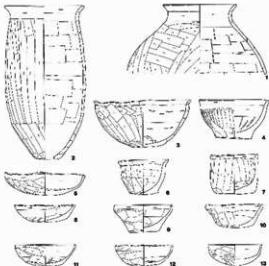


圖8 寺庄遺跡(2)

圖44 古墳時代佐原層出土土器(2)



圖43 新石器時代石



圖45 新石器時代石

圖46 新石器時代石製出土器(3)



圖47 新石器時代石製出土石、土製品



图46 11号位显微



图48号位显微·伊粉

图47图 第10-11号位显微



图49号位显微·伊粉

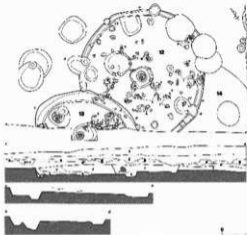


图13 - 13号位菌种



图14号位菌种



图15号位菌种 - 伊耶

图48图 第12 - 13 - 14号位菌种

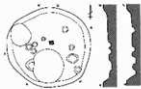


图15号位局部



图17号位局部



图14号位局部



图45图 图15·16·17号位局部

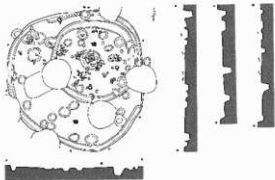


图30图 第19·19号位幼虫

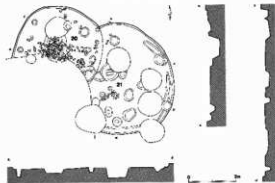


图31图 第20·21号位幼虫

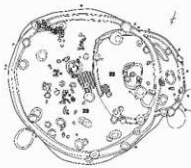


图545 第22、23号植物茎



图52号植物茎 - 伊藤



图23号植物茎 - 伊藤

2. 土 器 (第64～68図)

縄文時代の土器は、基本型より全部で160種類出されているが、この他にも在位の縄土中に土器が埋蔵されていたと推測されるものもある。形態は、平直形の片形や筒形を主とし、蓋筒は平底なものが多いが、第2号土器(第64図)だけは蓋がオーバーハンズする袋状に筒化した形態を呈しており特殊である。これらの中には、蓋筒を伴うものや蓋筒もしくはそれに近い土器を伴うものなどもあるが、多くは少量の土器片が出土するだけのものであり、その性格が蓋筒であるものは少ない。これらの多くは、出土し蓋が少なかったため埋蔵土層が隠蔽であるが、概ね縄文時代の前期前と同じ新石器時代から加賀川式土器の時期に該当すると考えてよいであろう。

蓋筒土器は、全部で19種類出されている(第64～82図)。これらは、蓋と土器に大抵の隙を伴うもの(1号～10号)、蓋筒に彫刻をもつもの(11号～14号)、蓋・筒・脚・蓋・脚・16号土器、蓋と土器に彫刻をもつもの(15号～19号)、蓋・筒・脚・蓋・脚・20号土器、蓋・筒・脚・蓋・脚・21号土器にその蓋と中の柄や蓋筒の彫刻に幾何や渦の模様したものが増えるに認められる。蓋筒に近い土器を伴う土塊は、大抵の出土状態の差異によって埋蔵・包封・混同などと考えられ、その性格は一概ではない。この中で特に16号土器(第66図)は、蓋筒の人間造形土器(埋蔵型)を伴って発見したもので、蓋と土器に高度な関係とするのが共通していることから、土器を包蔵して一時的に穴を充填した後、土器の上下部を露出して埋めもどすといった一連の行為が想像されるものである。

土器一覧表

土器番号	器名	形状	寸法	出土時期	出土遺物	備 考
1	第64号 片 器	114cm×17cm	26cm 蓋筒径1	大塚遺跡		
2	第65号 片 器	116cm×20cm	44cm 蓋筒径2	大塚遺跡		蓋に彫刻。
3	第66号 平直形片 器	146cm×7	13cm 蓋筒径3			蓋筒内に認められる。
4	第67号 片 器	7×7×15cm	26cm 蓋筒径4			蓋と土器に認められる。
5	第68号 片 器	7×7×15cm	16cm 蓋筒径5			
6	第69号 片 器	117cm×19cm	16cm 蓋筒径6		片形少量	蓋と土器に認められる。
7	第70号 片 器	81cm×15cm	16cm 蓋筒径7		片形少量	
8	第71号 片 器	123cm×12cm	25cm 蓋筒径8		土器片少量	
9	第72号 片 器	117cm×13cm	26cm 蓋筒径9			筒・脚・蓋を伴う。
10	第73号 片 器	112cm×13cm	26cm 蓋筒径10		片形少量	7号に似ている。
11	第74号 土器片	142cm×15cm	17cm 蓋筒径11			片形を伴う。
12	第75号 土器片	126cm×16cm	26cm 蓋筒径12		片形少量	筒口に認められる。
13	第76号 片 器	81cm×15cm	45cm 蓋筒径13			蓋の土器。
14	第77号 片 器	166cm×12cm	12cm 蓋筒径14		人間造形	
15	第78号 片 器	121cm×12cm	12cm 蓋筒径15		土器片少量	
16	第79号 片 器	126cm×12cm	8cm 蓋筒径16		土器片少量	
17	第80号 片 器	151cm×17cm	46cm 蓋筒径17		土器片・片形少量	
18	第81号 片 器	172cm×16cm	22cm 蓋筒径18		土器片少量	
19	第82号 片 器	81cm×15cm	25cm 蓋筒径19		土器片少量	
20	第83号 片 器	97cm×15cm	22cm 蓋筒径20		土器片少量	
21	第84号 平直形片 器	111cm×13cm	46cm 蓋筒径21		土器片少量	
22	第85号 平直形片 器	81cm×12cm	12cm 蓋筒径22		土器片少量	
23	第86号 片 器	122cm×16cm	45cm 蓋筒径23		大塚遺跡埋蔵(平直形片)伴う	筒口には認められる。蓋筒の上部に認められる。
24	片 器	7×7×7	25cm 蓋筒径24		土器片少量	

土曜時代	放送	放送時間	放送日	放送時間	放送内容	備考
71	第14回	中野元治	18:00~18:05	17:00	中野元治	中野元治
72	第14回	中野元治	18:05~18:10	17:05	中野元治	中野元治
73	第14回	中野元治	18:10~18:15	17:10	中野元治	中野元治
74	第14回	中野元治	18:15~18:20	17:15	中野元治	中野元治
75	第14回	中野元治	18:20~18:25	17:20	中野元治	中野元治
76	第14回	中野元治	18:25~18:30	17:25	中野元治	中野元治
77	第14回	中野元治	18:30~18:35	17:30	中野元治	中野元治
78	第14回	中野元治	18:35~18:40	17:35	中野元治	中野元治
79	第14回	中野元治	18:40~18:45	17:40	中野元治	中野元治
80	第14回	中野元治	18:45~18:50	17:45	中野元治	中野元治
81	第14回	中野元治	18:50~18:55	17:50	中野元治	中野元治
82	第14回	中野元治	18:55~19:00	17:55	中野元治	中野元治
83	第14回	中野元治	19:00~19:05	18:00	中野元治	中野元治
84	第14回	中野元治	19:05~19:10	18:05	中野元治	中野元治
85	第14回	中野元治	19:10~19:15	18:10	中野元治	中野元治
86	第14回	中野元治	19:15~19:20	18:15	中野元治	中野元治
87	第14回	中野元治	19:20~19:25	18:20	中野元治	中野元治
88	第14回	中野元治	19:25~19:30	18:25	中野元治	中野元治
89	第14回	中野元治	19:30~19:35	18:30	中野元治	中野元治
90	第14回	中野元治	19:35~19:40	18:35	中野元治	中野元治
91	第14回	中野元治	19:40~19:45	18:40	中野元治	中野元治
92	第14回	中野元治	19:45~19:50	18:45	中野元治	中野元治
93	第14回	中野元治	19:50~19:55	18:50	中野元治	中野元治
94	第14回	中野元治	19:55~20:00	18:55	中野元治	中野元治
95	第14回	中野元治	20:00~20:05	19:00	中野元治	中野元治
96	第14回	中野元治	20:05~20:10	19:05	中野元治	中野元治
97	第14回	中野元治	20:10~20:15	19:10	中野元治	中野元治
98	第14回	中野元治	20:15~20:20	19:15	中野元治	中野元治
99	第14回	中野元治	20:20~20:25	19:20	中野元治	中野元治
100	第14回	中野元治	20:25~20:30	19:25	中野元治	中野元治
101	第14回	中野元治	20:30~20:35	19:30	中野元治	中野元治
102	第14回	中野元治	20:35~20:40	19:35	中野元治	中野元治
103	第14回	中野元治	20:40~20:45	19:40	中野元治	中野元治
104	第14回	中野元治	20:45~20:50	19:45	中野元治	中野元治
105	第14回	中野元治	20:50~20:55	19:50	中野元治	中野元治
106	第14回	中野元治	20:55~21:00	19:55	中野元治	中野元治
107	第14回	中野元治	21:00~21:05	20:00	中野元治	中野元治
108	第14回	中野元治	21:05~21:10	20:05	中野元治	中野元治
109	第14回	中野元治	21:10~21:15	20:10	中野元治	中野元治
110	第14回	中野元治	21:15~21:20	20:15	中野元治	中野元治
111	第14回	中野元治	21:20~21:25	20:20	中野元治	中野元治
112	第14回	中野元治	21:25~21:30	20:25	中野元治	中野元治
113	第14回	中野元治	21:30~21:35	20:30	中野元治	中野元治
114	第14回	中野元治	21:35~21:40	20:35	中野元治	中野元治
115	第14回	中野元治	21:40~21:45	20:40	中野元治	中野元治
116	第14回	中野元治	21:45~21:50	20:45	中野元治	中野元治



图54 藻石土綱(1)

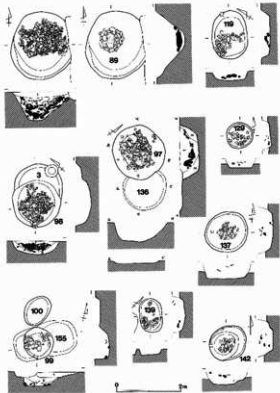


图266 黄土化石(2)

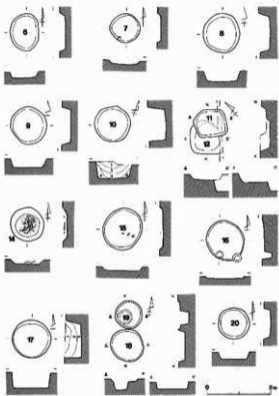


圖54 土坑(1)

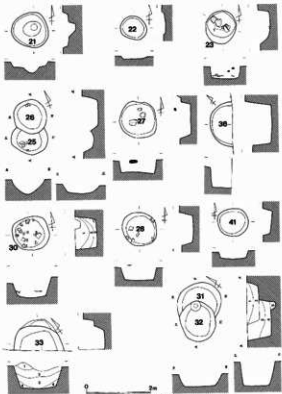


图57 陶器(2)

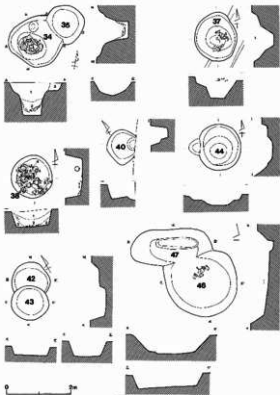


圖46 土 壺(3)

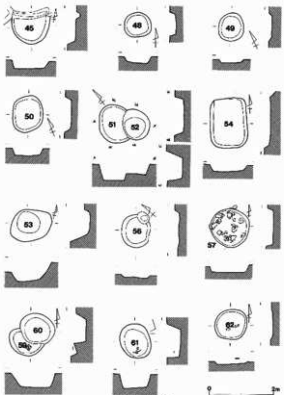


圖 50 至 62 (4)

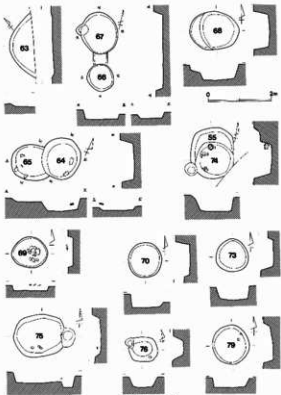
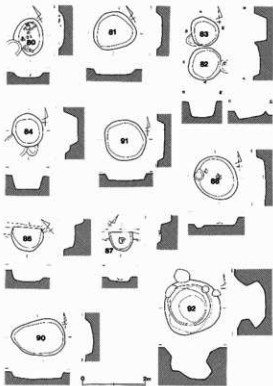


圖400 土 甕(5)



圖版 土 圖(4)

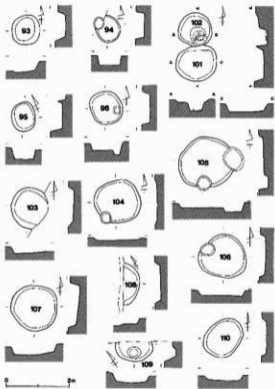


圖25 土 壺(7)

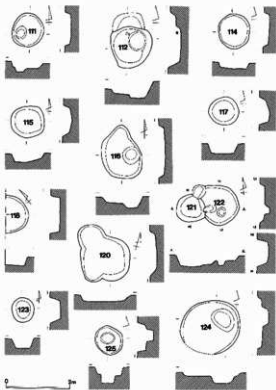
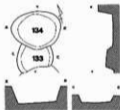


圖638 土 層 (8)



第4圖 土 器(9)

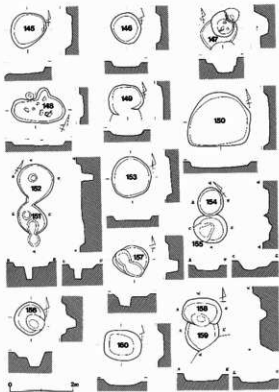


图65 土 虫 (10)

第19号土壌土質説明

第1層：深褐色土層（ローム粘土・黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第2層：黒褐色層（黄化粘土を均一に含む。粘性・しまりとも強い）

第3層：黒褐色土層（ローム粘土・黄化粘土を均一に含む。粘性・しまりとも強い）

第4層：暗栗褐色土層（ローム粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第20号土壌土質説明

第1層：黒褐色土層（ローム粘土・黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第2層：暗褐色土層（ローム粘土・黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第3層：黄褐色土層（ローム粘土を均一に含む。粘性・しまりとも強い）

第21号土壌土質説明

第1層：暗褐色土層（粘土・ローム粘土を均一に含む。粘性・しまりとも強い）

第2層：黒褐色土層（黄化粘土を多量に含む）

第3層：暗栗褐色土層（ローム粘土・黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第22号土壌土質説明

第1層：暗褐色土層（ローム粘土を均一に、黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第2層：暗褐色土層（ローム粘土・黄化粘土・黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第3層：暗栗褐色土層（ローム粘土を均一に含む。粘性・しまりとも強い）

第23号土壌土質説明

第1層：暗褐色土層（ローム粘土・黄化粘土・黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第2層：暗褐色土層（黄化粘土を均一に、黄化粘土・黄化粘土を含む。粘性・しまりとも強い）

第3層：暗褐色土層（黄化粘土を多量に、黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第4層：暗栗褐色土層（ローム粘土を均一に、黄化粘土・黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第24号土壌土質説明

第1層：黒褐色土層（ローム粘土・黄化粘土・黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第2層：暗褐色土層（黄化粘土を多量に、ローム粘土・黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第3層：暗褐色土層（黄化粘土を多量に、黄化粘土を均一に含む。粘性・しまりとも強い）

第4層：暗褐色土層（黄化粘土を多量に、黄化粘土を懸濁含む。粘性が認め、しまりはない）

第5層：暗栗褐色土層（ローム粘土・黄化粘土を含む。粘性・しまりとも強い）

第25号土壌土質説明

第1層：黒褐色土層（黄化粘土を多量に、ローム粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第2層：暗栗褐色土層（ローム粘土を均一に、黄化粘土を含む。粘性・しまりとも強い）

第26号土壌土質説明

第1層：黒褐色土層（黄化粘土を多量に、ローム粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第2層：暗褐色土層（ローム粘土を均一に、黄化粘土・黄化粘土を少量含む。粘性・しまりとも強い）

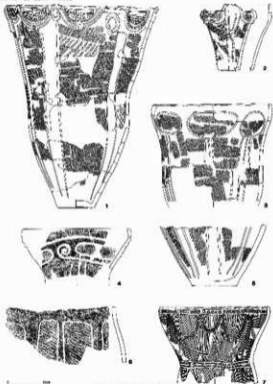
第27号土壌土質説明

第1層：暗褐色土層（ローム粘土・黄化粘土・黄化粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第2層：暗褐色土層（ローム粘土を懸濁含む。粘性・しまりとも強い）

第3層：暗栗褐色土層（ローム粘土を均一に、黄化粘土を含む。粘性・しまりとも強い）

2. 土 器 (第66—103號)



第66圖 第10号住居跡出土土器(1)

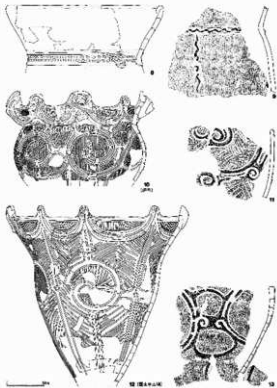
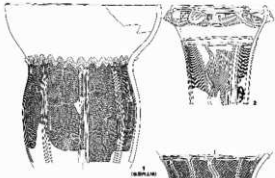


图 47 第 10 号位周原出土土器(2)

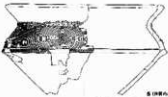
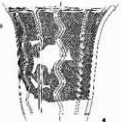


1 伊勢川式

2 伊勢川式



3



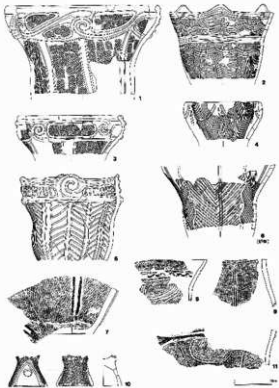
5 伊勢川式



6 (伊)



图11号住居跡出土土器



图四四 第12号住居遗址出土铜器

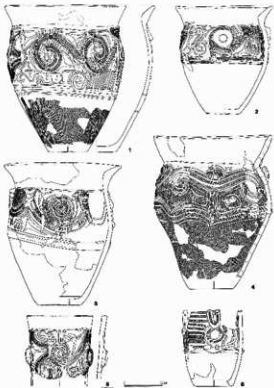


图700 第13号位所出土土器(1)

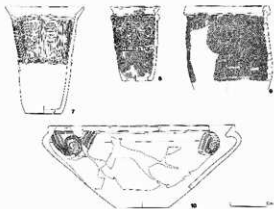


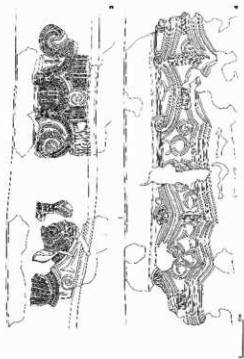
图71图 第13号位层出土土器(2)



图72图 第13号位层出土土器纹样图(1)



图 27 图 28 新石器时代彩陶纹饰 (2)

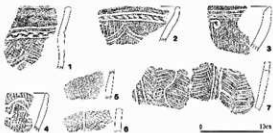




第75图 第13号位晋墓出土土器纹样局部(4)



第76图 第14号位晋墓出土土器



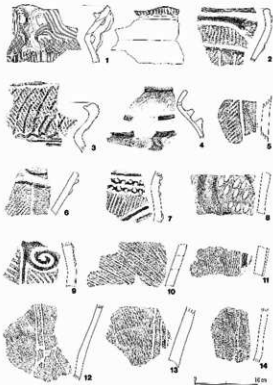


图77 图15号位遗址出土土器



图70 第100号遗址新石器时代陶片

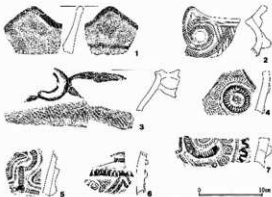


图79 第17号位置出土铜器

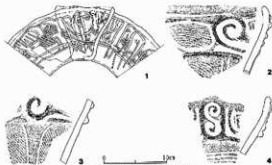


图80 第18号位置出土铜器(1)

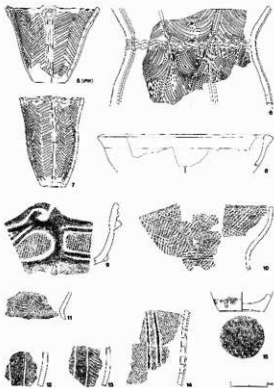
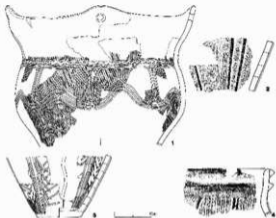


图10 第10层低层寒武统土器(2)



第82图 第10号位所出出土器



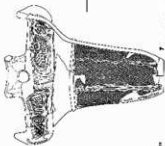
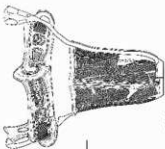
第83图 第20号位所出出土器(1)



6



5 (放大)



7

图 25 中华草履虫的生殖系统 (2)

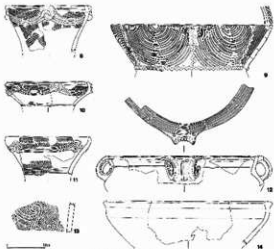


图20 第20号位墓出土铜器(3)



图21 第21号位墓出土铜器

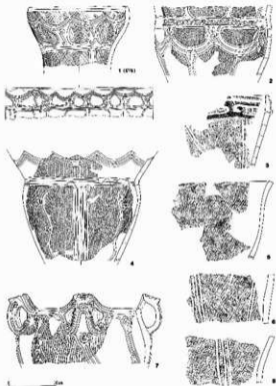
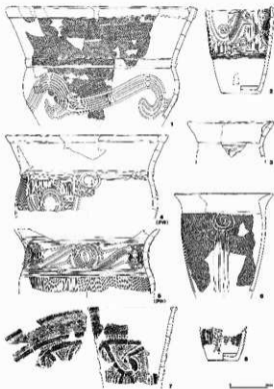


图27 第22号位周原出土土器



第23圖 第23号位周朝出土土器(1)

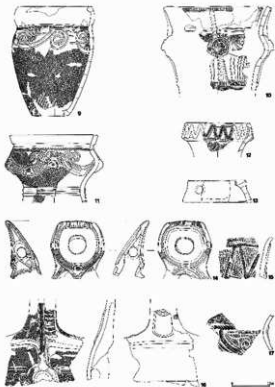
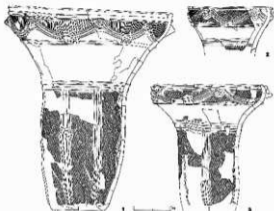


图89 第23号住居跡出土土器(2)



SK1



SK2



SK3

新石器 土器出土器(1)



图914



1



2



3

图915

图915 土质陶土器(2)

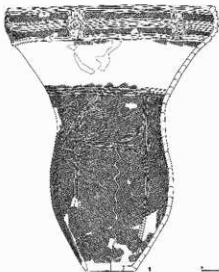


圖 414



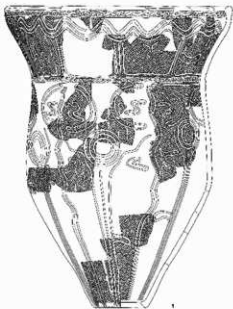
圖 415 土壤剖面圖(3)



5437



图97 土城山土器(4)



545

图54 土质出土器(5)



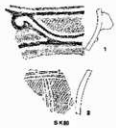
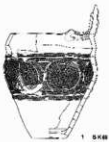


图40 土器出土器(6)

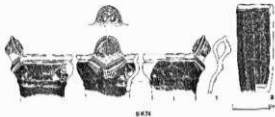


图74

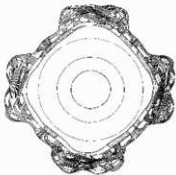


图75

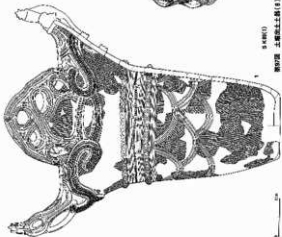
图76 土质出土土器(7)

(A) 椰子干果种子 图 258

(1) 横切面



(2) 纵切面



出土遺物	石	磁器石片	竹製品石	模範石類	石	磁器	漆器	陶器	銅器	金	計
新石器土層	3	3	3	1	0	0	1	0	0	0	8
新石器土層	3	0	3	0	0	0	1	0	0	0	4
新石器土層	3	0	3	1	0	0	2	0	0	0	6
新石器土層	3	0	3	0	0	0	0	1	1	0	6
新石器土層	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0	4
新石器土層	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	4
新石器土層	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
新石器土層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
新石器土層	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
中 計	3	3	17	4	0	0	2	1	0	0	20
新石器土層	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	4
新石器土層	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
新石器土層	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
新石器土層	0	0	4	1	0	0	0	1	0	0	6
中 計	0	0	13	2	0	0	0	1	0	0	16
總 合 計	3	3	30	6	0	0	2	1	0	0	42

遺物出土位置一覽表

石 器 (厚美段層II土層)

番号	出土遺物	形式	横断面	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	製作法	部類	備 考
1	新石器土層	短石片	短石片	3.0	1.8	0.3	1.8	打削	打削	打削の打削物
2	新石器土層	+	短石片	3.0	1.8	0.3	1.8	+	+	+
3	新石器土層	+	短石片	3.0	1.8	0.3	1.8	+	+	+
4	新石器土層	+	短石片	1.8	1.2	0.3	0.7	打削	打削	+
5	新石器土層	+	短石片	1.6	1.0	0.2	0.4	+	+	+
6	新石器土層	+	短石片	1.6	1.0	0.3	0.7	+	+	打削の打削物
7	+	短石片	短石片	1.1	1.0	0.3	1.0	打削	打削	+
8	新石器土層	+	短石片	1.7	1.0	0.2	1.0	打削	打削	+
9	+	短石片	短石片	0.3	1.0	0.3	1.0	+	+	打削
10	新石器土層	+	短石片	0.0	1.2	0.3	0.6	打削	+	+
11	新石器土層	+	短石片	0.1	1.0	0.3	1.0	打削	打削	+
12	新石器土層	+	短石片	0.0	1.0	0.3	0.7	+	+	+

竹製品石 (厚美段層II土層)

番号	出土遺物	形式	横断面	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	製作法	部類	備 考
1	新石器土層	短石片	短石片	10.0	5.2	1.0	101	打削	打削	打削の打削物
2	+	短石片	+	6.7	1.0	1.0	1.0	+	+	打削
3	+	短石片	+	6.7	1.0	0.4	1.0	打削	打削	+
4	+	短石片	短石片	8.5	3.0	1.0	60	+	+	打削
5	+	短石片	短石片	6.0	6.0	0.4	80	打削	打削	+
6	+	短石片	短石片	0.0	0.0	1.0	0.0	+	+	打削、打削物
7	+	短石片	短石片	8.0	3.1	1.0	62	+	+	打削、打削物
8	新石器土層	短石片	短石片	3.0	4.1	2.0	30	+	+	+
9	+	短石片	短石片	10.0	4.3	1.0	100	打削	打削	打削の打削物
10	+	短石片	短石片	10.0	4.3	1.0	99	+	+	打削の打削物
11	+	短石片	短石片	10.5	3.1	1.7	105	打削	打削	+

番号	加工種類	型 式	機中数	長さmm	幅mm	厚さmm	重量kg	素材	用途	備 考
12	第1号作尺用板	機 器	鋸切欠	11.10	5.3	2.4	113	鋼材	片削	片削用板
13	第1号作尺用板	機 器	鋸切欠	8.80	3.9	1.6	70	鋼	片削	片削
14	“	鋸切欠	鋸切欠	7.8	4.3	0.8	47	鋼材	片削	片削
15	“	鋸切欠	鋸切欠	7.70	4.3	1.5	69	鋼材	“	片削用板の中心
16	“	鋸切欠	“	6.80	4.0	0.8	38	鋼材	“	“
17	“	“	鋸切欠	6.70	4.1	1.7	71	鋼材	片削	片削用板の中心
18	“	“	“	6.60	3.6	1.4	61	鋼材	片削	片削用板の一部用板
19	“	“	鋸切欠	6.40	4.1	2.3	70	“	“	片削用板の中心
20	“	“	“	6.40	3.9	1.20	61	“	“	片削、鋸切欠用
21	“	“	鋸切欠	6.40	4.8	1.4	70	鋼材	“	“
22	“	“	“	6.30	5.2	1.7	77	鋼	片削	“
23	“	“	“	6.00	5.4	1.5	69	鋼材	片削	片削
24	“	“	鋸切欠	5.1	4.6	1.6	71	“	“	“
25	“	“	鋸切欠	11.80	4.6	0.1	129	鋼	片削	片削
26	“	“	鋸切欠	11.8	4.9	2.4	140	鋼材	“	片削用板の中心
27	“	“	“	11.7	4.9	1.7	130	“	片削	片削用板の中心
28	“	分銅用	“	8.8	4.0	1.3	65	“	“	“
29	“	鋸切欠	鋸切欠	6.20	3.3	1.8	50	“	“	“
30	“	“	“	6.40	4.2	1.3	50	“	“	片削用板の中心
31	“	分 割	分銅用	6.30	3.8	2.0	60	“	“	“
32	“	鋸切欠	“	6.30	3.1	1.3	51	“	片削	“
33	“	“	鋸切欠	5.8	3.8	1.3	49	鋼材	“	“
34	“	分 割	分銅用	6.30	3.9	1.8	51	“	“	“
35	第1号作尺用板	機中数	鋸切欠	4.80	4.7	0.8	35	“	“	“
36	“	“	“	8.40	3.6	1.8	67	鋼材	“	片削用板の中心
37	第1号作尺用板	“	鋸切欠	11.2	4.1	3.8	113	“	“	片削用板の中心
38	第1号作尺用板	機 器	“	8.3	5.1	2.3	113	鋼材	片削	片削、鋸切欠
39	第1号作尺用板	“	鋸切欠	7.80	4.0	2.4	100	鋼材	片削	片削
40	第1号作尺用板	機 器	鋸切欠	6.10	3.3	1.1	60	鋼	片削	片削
41	第1号作尺用板	機 器	鋸切欠	4.40	3.0	1.7	41	鋼材	片削	“
42	第1号作尺用板	機中数	鋸切欠	12.40	4.9	2.2	200	鋼	片削	“
43	“	鋸切欠	鋸切欠	12.1	4.7	2.7	192	鋼材	片削	片削用板の中心
44	“	鋸切欠	“	8.3	3.7	2.2	69	“	“	片削用板の中心
45	“	鋸切欠	“	8.7	4.3	1.5	71	“	“	“
46	“	分銅用	“	9.10	4.4	1.3	70	“	“	“
47	“	鋸切欠	“	7.10	3.9	1.9	70	鋼材	“	片削用板
48	“	鋸切欠	“	7.30	3.1	1.3	70	“	“	片削用板
49	“	鋸切欠	“	7.00	3.00	1.1	62	鋼材	片削	片削
50	“	鋸切欠	“	42.8	4.8	1.3	136	“	“	“
51	“	分銅用	“	13.6	7.1	2.2	197	鋼材	“	“
52	“	鋸切欠	鋸切欠	6.40	4.0	1.6	50	“	“	片削
53	“	鋸切欠	“	7.7	3.3	2.3	60	“	“	“
54	第1号作尺用板	機 器	鋸切欠	6.70	3.8	1.6	49	“	片削	“
55	第1号作尺用板	機中数	鋸切欠	13.70	3.8	1.1	140	“	片削	“
56	第1号作尺用板	“	鋸切欠	11.40	3.9	2.0	120	鋼材	“	片削用板の中心
57	第1号作尺用板	機中数	鋸切欠	8.80	3.9	2.4	70	鋼材	片削	片削、鋸切欠の中心

書名	著者	形式	種別	冊数	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
61	高田司上	著	書	12.2	2.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
62	高田司上	著	書	12.0	1.0	0.5	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
63	高田司上	著	書	9.9	4.5	1.9	123	洋装	洋装	○	京都府立大学
64	高田司上	著	書	12.60	4.8	2.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
65	高田司上	著	書	12.8	3.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
66	高田司上	著	書	12.00	3.0	0.5	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
67	高田司上	著	書	12.40	4.1	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
68	高田司上	著	書	12.0	4.3	2.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
69	高田司上	著	書	12.1	3.3	1.4	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
70	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
71	高田司上	著	書	12.0	3.0	1.5	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
72	高田司上	著	書	12.0	4.0	2.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
73	高田司上	著	書	12.1	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
74	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
75	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
76	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
77	高田司上	著	書	12.0	3.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
78	高田司上	著	書	12.0	4.0	2.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
79	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
80	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
81	高田司上	著	書	12.0	4.0	2.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
82	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
83	高田司上	著	書	12.0	3.0	2.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
84	高田司上	著	書	12.0	4.0	2.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
85	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
86	高田司上	著	書	12.0	4.0	2.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
87	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
88	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
89	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
90	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
91	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
92	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
93	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
94	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
95	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
96	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学

京都府立大学 (平成25年度)

書名	著者	形式	種別	冊数	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
1	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
2	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
3	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学
4	高田司上	著	書	12.0	4.0	1.0	120	洋装	洋装	○	京都府立大学

番号	論文題名	種 別	発表年	発表頁	発表誌	掲載頁	種別	備 考
5	銀行学入門論	凡例編「解説文」	1979	19	4, 5	129	○	
6	銀行学入門論	+	1977	19	3, 7	129	○	
7	銀行学入門論	+	1977	19	3, 9	131	○	
8	銀行学入門論	定形式	77	19	1, 1	22	○	本誌、新増刊号に掲載
9	銀行学入門論	+	88	4, 2	1, 6	22	○	本誌

銀行学雑誌（専攻学雑誌）一覧

番号	論文題名	種 別	発表年	発表頁	発表誌	掲載頁	種別	備 考
1	銀行学入門論	編纂記事	8, 3	8, 9	9, 8	12	○	○
2	+	+	8, 8	8, 1	1, 1	102	○	○
3	+	+	7, 8	7, 1	1, 1	67	○	○
4	+	編纂記事	4, 3	4, 7	1, 8	29	○	○
5	銀行学入門論	編纂記事	3, 9	4, 1	1, 8	85	○	○ 新刊として掲載
6	+	編纂記事	3, 1	4, 1	1, 8	69	○	○
7	+	+	4, 2	7, 1	1, 3	48	○	○
8	銀行学入門論	調 査	3, 1	7, 2	1, 3	31	○	○
9	+	+	2, 8	4, 8	1, 8	33	○	○
10	銀行学入門論	編纂記事	4, 1	4, 1	1, 1	27	○	○
11	銀行学入門論	読者調査	4, 8	5, 1	1, 1	38	○	○
12	銀行学入門論	読者調査	4, 8	5, 1	1, 7	39	○	○
13	銀行学入門論	+	7, 1	6, 9	1, 1	124	○	○
14	銀行学入門論	調 査	3, 1	4, 4	1, 1	42	○	○
15	銀行学入門論	+	3, 4	7, 1	6, 8	34	○	○
16	銀行学入門論	+	7, 6	3, 4	1, 2	6, 1	○	○
17	銀行学入門論	読者調査	4, 8	5, 8	1, 8	75	○	○
18	銀行学入門論	読者調査	4, 9	12, 4	1, 6	76	○	○ 新入
19	銀行学入門論	読者調査	4, 4	8, 8	1, 2	71	○	○
20	銀行学入門論	+	3, 8	5, 1	1, 1	21	○	○
21	+	+	2, 1	8, 9	1, 1	40	○	○ 新刊記事
22	銀行学入門論	読者調査	3, 9	7, 1	1, 2	32	○	○ 新入
23	銀行学入門論	読者調査	4, 1	7, 7	1, 1	41	○	○
24	+	読者調査	6, 2	6, 1	1, 7	49	○	○ 読者調査
25	+	+	3, 8	6, 1	1, 1	26	○	○ 読者調査(2000年10月号の巻頭記事)
26	銀行学入門論	+	4, 1	6, 9	1, 1	17	○	○ 新入、読者調査(2007年1月号の巻頭記事)
27	銀行学入門論	調 査	4, 9	4, 8	1, 3	35	○	○ 読者調査(2007年10月号の巻頭記事)
28	銀行学入門論	読者調査	4, 1	4, 8	1, 8	100	○	○ 読者調査(2008年1月号)
29	+	調 査	5, 1	8, 1	1, 9	89	○	○ 読者調査(2008年1月号)
30	+	読者調査	1, 6	7, 7	2, 9	94	○	○
31	+	+	3, 1	8, 9	1, 1	28	○	○ 銀行学入門論増刊号掲載
32	+	調 査	4, 2	8, 1	1, 9	29	○	○
33	+	読者調査	2, 4	6, 8	1, 9	47	○	○
34	+	調 査	2, 8	4, 9	6, 1	23	○	○
35	+	+	4, 7	4, 1	1, 8	43	○	○ 読者調査(2009年1月号)
36	+	読者調査	4, 8	6, 7	2, 1	44	○	○ 銀行学入門論増刊号掲載
37	+	調 査	6, 1	6, 1	1, 8	79	○	○ 銀行学入門論増刊号掲載
38	+	読者調査	4, 2	7, 7	2, 8	83	○	○

番号	国土用途	種 別	最大Aa	幅Aa	最大Aa	重量kg	用途	備考	備 考
39	農地(畑作地)	畑 作	5.7	2.9	2.1	90	雑穀	○	
40	+	畑作地	6.9	4.0	1.1	26	○	○	
41	+	+	4.0	2.2	2.0	26	雑穀	○	
42	+	畑 作	4.6	2.2	1.8	100	+	○	
43	+	畑作地	4.1	1.2	1.1	20	雑穀	○	稲刈後の 田んぼ用草
44	農地(水田)	+	4.0	2.9	1.1	41	雑穀	○	稲刈後の 田んぼ用草
45	農地(雑草)	+	3.2	2.2	1.8	20	雑穀	○	稲刈後の田んぼ用草
46	+	畑作地	5.0	4.1	4.8	23	○	○	
47	+	畑 作	2.0	4.0	1.4	10	+	○	
48	+	畑作地	6.2	6.0	1.0	75	+	○	
49	+	+	4.5	2.4	1.7	20	+	○	
50	+	畑作地	4.2	3.9	1.0	34	○	○	
51	+	畑作地	4.4	6.2	6.0	15	+	○	
52	+	畑 作	2.4	6.2	1.1	22	○	○	
53	+	畑 作	5.6	6.6	2.1	171	雑穀	○	稲刈後の田んぼ用草、田んぼ用草

表 16 (平成30年度41～48)

番号	国土用途	種 別	最大Aa	幅Aa	最大Aa	重量kg	用途	備考	備 考	
1	農地(畑作地)	畑 作	5.0	18.2	17.4	2.9	4400	雑穀	○	農地(畑作地)
2	農地(畑作地)	畑 作	5.0	18.2	17.4	2.9	4400	雑穀	○	農地(畑作地)
3	農地(水田)	水田	5.2	27.2	19.4	2.2	4700	雑穀	○	農地(水田)
4	農地(水田)	水田	5.0	26.0	14.0	1.1	2000	+	○	農地(水田)
5	農地(畑作地)	+	1.8	2.0	1.4	1.0	1200	雑穀	○	農地
6	農地(水田)	水田	5.0	18.0	18.0	4.4	4000	雑穀	○	農地(水田)
7	+	畑作地	5.0	18.0	16.0	6.1	2000	+	○	農地(畑作地)
8	農地(水田)	水田	5.0	13.0	16.0	6.1	2000	+	○	農地(水田)
9	農地(水田)	+	5.0	13.0	20.0	6.2	2200	+	○	農地(水田)

表 17 (平成30年度49)

番号	国土用途	種 別	最大Aa	幅Aa	最大Aa	重量kg	用途	備考	備 考
1	農地(畑作地)	畑 作	2.5	2.7	4.9	60	雑穀	○	稲刈後の田んぼ用草
2	農地(雑草)	+	2.0	6.9	4.8	100	+	○	
3	農地(水田)	水田	1.0	1.0	3.0	100	+	○	
4	農地(畑作地)	畑作地	1.5	3.2	4.2	440	+	○	
5	農地(水田)	水田	10.0	6.8	4.1	1400	雑穀	○	農地(水田)の稲刈後の田んぼ用草
6	農地(水田)	水田	6.4	6.0	3.0	200	雑穀	○	農地(水田)の稲刈後の田んぼ用草
7	農地(水田)	水田	13.0	6.0	4.9	1600	+	○	
8	+	畑作地	1.8	2.1	4.2	100	雑穀	○	稲刈後の田んぼ用草
9	+	畑作地	11.2	17.0	3.4	1000	+	○	農地(畑作地)の稲刈後の田んぼ用草
10	農地(水田)	水田	7.0	13.0	6.9	1000	雑穀	○	
11	農地(水田)	水田	17.0	2.1	1.0	1000	雑穀	○	農地(水田)の稲刈後の田んぼ用草

表 18 (平成30年度44～46)

番号	国土用途	種 別	最大Aa	幅Aa	最大Aa	重量kg	用途	備考	備 考
1	農地(畑作地)	畑 作	25.0	2.2	2.2	200	雑穀	○	
2	+	畑作地	23.0	13.0	2.0	1000	雑穀	○	

番号	出土遺物	埋藏部	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	出土状況	備考	備 考
3	第1号青銅鏡	内 部	26.8	8.9	3.4	730	表・裏1	○	甲行
4	"	銅製品	(24.4)	7.4	4.3	(450)	裏1	○	
5	第2号青銅鏡	"	(17.3)	(8.8)	1.4	(171)	裏2	×	
6	"	"	(15.1)	(7.2)	2.9	(247)	裏2	○	
7	第2号青銅鏡	銅製品	42.4	22.9	(7.3)	(956)	裏3	○	甲行
8	第20号土器	銅製品	(35.7)	(9.8)	4.3	(413)	裏1	○	
9	第27号土器	"	(42.2)	(12.0)	4.8	(522)	表2裏1	○	百瀬の可成り品
10	第54号土器	"	(49.9)	9.1	4.4	(312)	表1裏1	○	高野山より出土品
11	"	"	(24.2)	(24.0)	(8.4)	(232)	裏1	○	銅板或銅
12	"	"	(13.3)	(6.1)	3.4	(22)	裏2	○	百瀬の可成り品
13	第41号土器	"	(8.4)	(13.5)	5.1	(312)	裏1	○	百瀬の可成り品
14	第29号土器	"	(27.2)	(9.7)	4.3	(344)	裏1	○	
15	"	"	(24.8)	(12.9)	4.7	(249)	裏1	○	
16	第46号土器	"	(8.1)	(16.1)	2.5	(60)	裏2	○	
17	"	"	(2.2)	9.0	4.6	(279)	表1裏2	×	
18	第20号土器	"	(25.1)	(7.9)	4.4	(340)	裏2	×	
19	第22号土器	"	(27.4)	(22.6)	2.1	(364)	裏1裏2	○	
20	第3号土器	"	(26.6)	8.3	(3.2)	(250)	裏2	○	
21	第14号土器	"	(25.2)	(9.7)	(1.7)	(286)	裏4	○	百瀬の可成り品
22	"	"	(22.5)	(11.1)	3.4	(266)	表1裏1	○	埋没品
23	"	"	(24.7)	(21.2)	2.3	(195)	表1裏1	○	埋没品
24	第16号土器	"	(23.1)	9.4	(2.4)	(186)	裏1	×	
25	"	"	(16.2)	(7.8)	(3.2)	(22)	裏1	○	高野山の可成り品
26	"	"	(6.2)	(4.8)	(2.2)	(42)	裏1	×	
27	第19号土器	"	(4.9)	(4.8)	(3.5)	(83)	裏2	×	

● 鏡 (写真図録44上段)

番号	出土遺物	埋藏部	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	資料	備考	備 考
1	第17号土器	上平穴	(3.2)	4.9	1.4	(23)	表1	×	高野山より出土
2	第17号土器	同上	3.1	4.1	1.2	(43)	裏1表1	×	高野山より出土品
3	第19号青銅鏡	"	7.4	3.4	1.1	(29)	裏1	×	埋没品
4	第21号青銅鏡	"	6.4	4.3	1.6	(42)	銅板乳白	×	埋没品
5	第14号青銅鏡	"	7.4	3.7	2.2	(59)	銅板	×	埋没品
6	第22号青銅鏡	"	6.2	3.7	2.2	(77)	"	×	埋没品

● 銅製品・土器 (写真図録44下段)

番号	出土遺物	埋藏部	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	資料	備考	備 考
1	第17号青銅鏡	内 部	24.4	9.4	3.7	(290)	裏	×	上二宮の可成り品
2	第19号土器	"	(24.8)	3.7	1.4	(250)	銅片	×	高野山より出土品
3	第16号土器	"	(41.3)	3.2	1.7	(270)	銅	×	高野山より出土品
4	第17号土器	"	(41.2)	3.2	1.9	(222)	銅片	×	高野山より出土品
5	第20号青銅鏡	銅製品	(15.4)	4.1	1.6	(41)	銅	×	高野山より出土品
6	第44号土器	銅製品	(17.9)	3.8	3.4	(112)	銅片	×	高野山より出土品
7	第1号青銅鏡	"	(13.2)	3.2	1.2	(69)	"	×	高野山より出土品
8	第12号土器	土器	(23.2)	3.7	1.3	(69)	"	×	高野山より出土品
9	第21号青銅鏡	銅製品	(8.9)	(2.2)	1.4	(26)	銅片	×	高野山より出土品

参考文献

- 本 田 浩 一 (1986) 『新選集・竹久門下』 埼玉県立総合文化財団総合事業団総合出版部
櫻井浩一・笠原弘也 (1985) 『竹久門・人間学研究所・昭和五十年・今までの第一—』(下巻) 筑波大学 埼玉県立総合文化財団総合事業団総合出版部
- 重 田 正 典 (1984) 『早稲田大学における総合文化財団設置の経緯』 早稲田大学
(1985) 『早稲田大学における総合文化財団設置の経緯(2)』 早稲田大学
- 石 橋 和 郎 (1984) 『新選集・竹久門下』 埼玉県立総合文化財団総合事業団総合出版部
- 石 上 真 司 (1984) 『新選集・竹久門下』 埼玉県立総合文化財団総合事業団総合出版部
- 大 江 隆 文 (1982) 『埼玉県立総合文化財団の発祥—企画案の経緯—』 本誌(埼玉県立総合文化財団総合事業団刊)
- 岡 本 隆 博 (1982) 『国史・郷土の意識』 法政大学出版部
- 川 崎 文 彦 郎 (1980) 『新選集』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
(1982) 『新選集(2)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
(1982) 『埼玉県立における近代時代の概観』 『埼玉県立における総合文化財団の成立と発展』 埼玉県立総合文化財団総合出版部 埼玉県立総合文化財団刊
- 小 久 保 直 (1977) 『熊本県立環境』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
- 中 土 隆 (1982) 『新選集(2)』 新刊選集
- 森 本 隆 彦 (1984) 『近代化の歴史の検証』 『検証』 筑波大学 筑波大学会
- 曾 田 浩 文 (1984) 『埼玉県における近代史の検証』 『近代史の検証』 筑波大学総合文化財団総合出版部
森田浩文・田代忠雄 (1984) 『熊本県立環境の検証』 『熊本県立環境の検証』 埼玉県立総合文化財団総合出版部 埼玉県立総合出版部
- 藤 本 隆 博 (1980) 『人ノ人間学』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
(1982) 『人ノ人間学—下巻—』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
- 藤 本 隆 博・丸 山 隆 (1980) 『埼玉県立総合文化財団の経緯概観』 『埼玉県立における総合文化財団の成立と発展』 埼玉県立総合文化財団総合出版部 埼玉県立総合出版部
- 森 本 隆 彦 (1980) 『新選集(2)』 新選集(2)筑波大学会
(1980) 『人ノ人間学(1)』 早稲田大学総合文化財団総合出版部
- 立 花 隆 博 (1982) 『新選集』 埼玉県立総合文化財団総合事業団総合出版部
(1982) 『新選集(2)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団総合出版部
- 藤 本 隆 (1980) 『埼玉における環境文化財団の設置の経緯』 『新選集』 新刊選集 埼玉県立総合文化財団総合出版部
藤本隆・森田浩文・田代忠雄 (1984) 『埼玉の環境意識の検証』 『環境意識』 埼玉県立総合文化財団総合出版部
日本学術振興会 (1982) 『北関東を中心とする東北地域の研究(資料)』
- 藤 本 隆 (1980) 『新選集(2)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団総合出版部
埼玉県立総合文化財団総合事業団
- 中 土 隆 (1980) 『新選集(2)』 新刊選集
- 坂 本 一 郎 (1987) 『熊入道十郎の経歴(2)』 本誌『新選集(2)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊 (新刊選集)
(1987) 『新選集(2)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
(1988) 『熊入道十郎の経歴(3)』 本誌『新選集(2)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊 (新刊選集)
(1989) 『熊入道十郎の経歴(4)』 本誌『新選集(2)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
(1990) 『熊入道十郎の経歴(5)』 本誌『新選集(2)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
(1991) 『熊入道十郎の経歴(6)』 本誌『新選集(2)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊 (新刊選集)
(1992) 『熊入道十郎の経歴(7)』 『熊入道十郎の経歴(7)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
埼玉県立総合文化財団総合出版部
- 曾 田 浩 文 (1979) 『新選集—熊入道—』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
(1980) 『新選集(2)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
- 曾 田 浩 一 (1980) 『新選集—熊入道—』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
新 藤 隆 博 (1984) 『熊入道十郎の経歴(8)』 『熊入道十郎の経歴(8)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊
辻 崎 武 (1980) 『熊入道十郎の経歴(9)』 『熊入道十郎の経歴(9)』 埼玉県立総合文化財団総合事業団刊

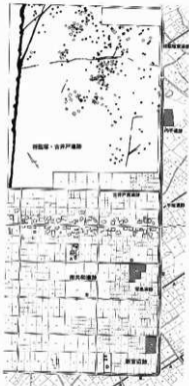
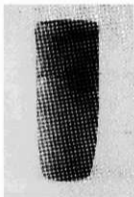


図146 近畿の発掘調査遺跡と奈良・平安時代の遺構

写 真 图 版





齒科材料表面顯微鏡下之樣本



齒科材料表面顯微鏡下之樣本



圖 1 射孔圖



圖 2 射孔圖

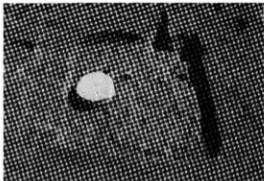


図 1 円柱状の鋳物



図 2 円錐状の鋳物

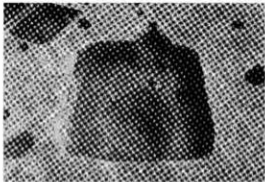


圖 3 竹仔窟跡



圖 4 竹仔窟跡 a~f



第 4 次印刷



第 4 次印刷



圖 5 編入物影



図 6 編入物影四コマ目



圖 5 纖維狀組織 (x 100)



圖 6 纖維狀組織



圖 7 纖維狀組織



圖 8 竹生葉切



圖 9 竹生葉切



图 4-1 牛仔的局部素描上色效果



图 4-2 牛仔的局部素描上色效果

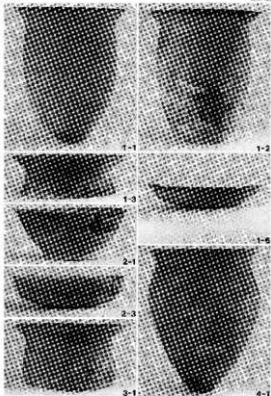


图 1—10 州内及外土壤

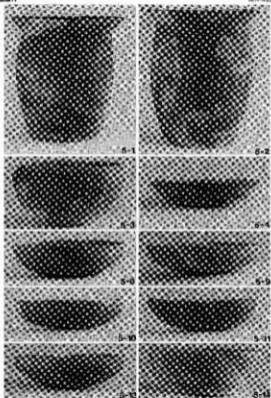
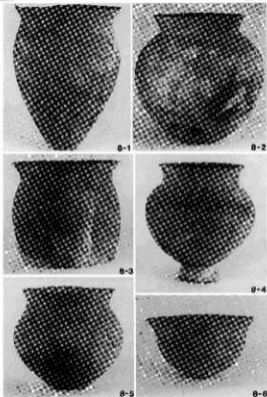


圖 5 与 圖 5 对应的十六图



图例 2 点阵图例(十) (1)

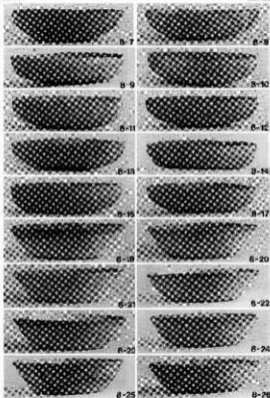


圖 13 土壤的試驗(土壤(2))



藜的莖部白粉狀分泌



白粉狀腺管區葉柄



白粉狀腺管區心葉柄



白粉狀腺管區葉柄



葉上毛狀腺管



葉柄基部腺管



葉上毛狀腺管



葉上毛狀腺管葉子



図 1 抽出画像



図 2 抽出画像の逆



図 3 抽出画像



図 4 抽出画像の逆



図 5 抽出画像



図 6 抽出画像の逆



図 7 抽出画像



図 8 抽出画像の逆



圖 6 原像圖像



圖 7 原像旋轉 90°



圖 8 原像旋轉 45°



圖 9 原像旋轉 135°



圖 10 原像旋轉 180°



圖 11 原像旋轉 225°



圖 12 原像旋轉 270°

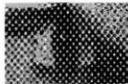


圖 13 原像旋轉 315°



圖 17-1 初始圖像



圖 17-2 初始圖像



圖 17-3 初始圖像



圖 17-4 初始圖像馬面上狀態



圖 17-5 初始圖像



圖 17-6 初始圖像



圖 17-7 初始圖像



圖 17-8 初始圖像



第13羽佐賀種



第13羽佐賀種の羽毛上代部



第14羽佐賀種



第15羽佐賀種



第16羽佐賀種



第16羽佐賀種の羽毛上代部



第17羽佐賀種



第18羽佐賀種



圖 19-1 洋甘菊根莖



圖 19-2 洋甘菊根莖

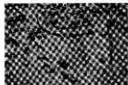


圖 19-3 洋甘菊根莖



圖 19-4 洋甘菊根莖



圖 19-5 洋甘菊根莖的 1.5 倍



圖 19-6 洋甘菊根莖



圖 19-7 洋甘菊根莖



圖 19-8 洋甘菊根莖



第 20 行 1 號



第 20 行 2 號



第 20 行 3 號



第 20 行 4 號



第 20 行 5 號 (原形)



第 20 行 6 號



第 20 行 7 號



第 20 行 8 號



圖20 土壤



圖21 腐爛土壤



圖22 土壤



圖23 土壤



圖24 土壤(高倍)



圖25 土壤



圖26 土壤



圖27 土壤(高倍)



圖22-1上體



圖22-2上體(放大)



圖22-3上體(放大)



圖22-4上體



圖22-5上體兼顯示土狀體



圖22-6上體(放大)



圖22-7上體



圖22-8上體(放大)



第104号土壤(黑石)



第105号土壤(黑石)



第107号土壤



第109号土壤(黑石)



第137号土壤(黑石)



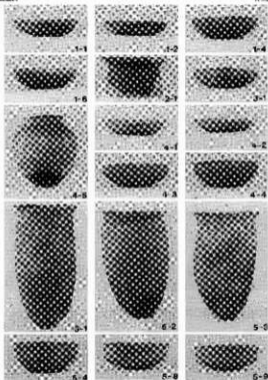
第139号土壤(黑石)



第141号土壤(黑石)



第143号土壤(黑石)



研究通所口地内西七上圖(1)

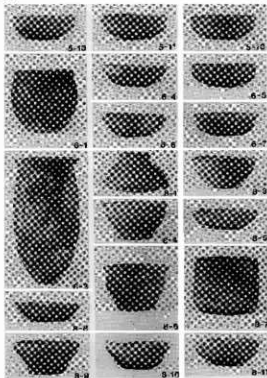


图 25 图 25 图 25 图 25 图 25 图 25



新武吉砂岩点高上土器(3)



12-1



12-2



12-5



12-6



12-10



13-9



13-1



13-3



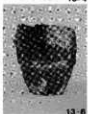
13-4



13-2



13-8



13-6

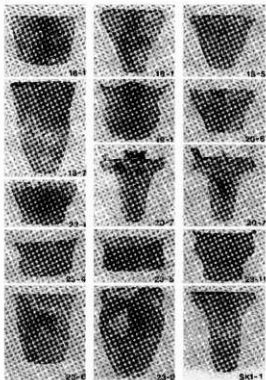
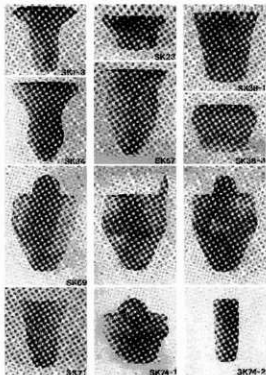
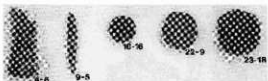
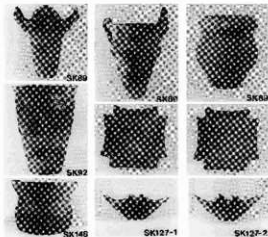
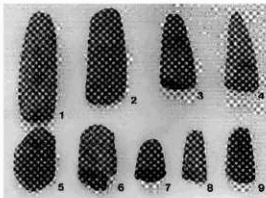
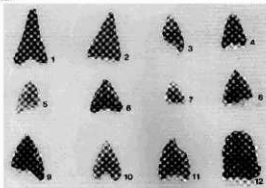


FIGURE 10. 18-1, 18-2, 18-3

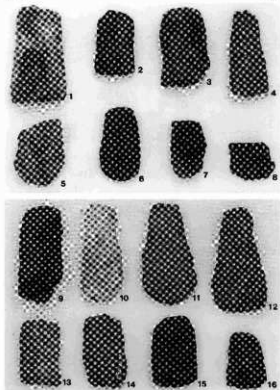


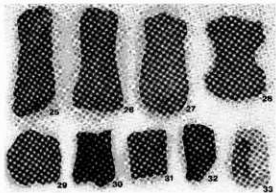
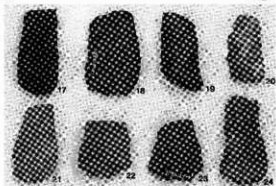
新发现的植物体(4)

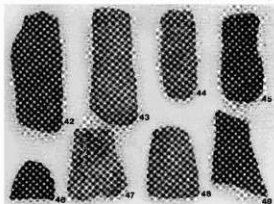
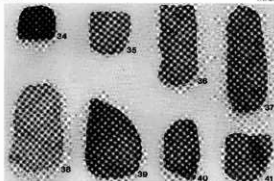


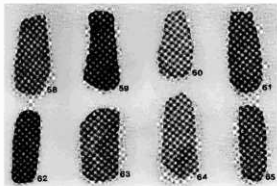
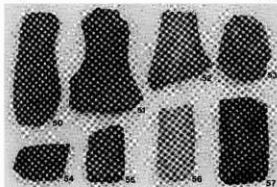


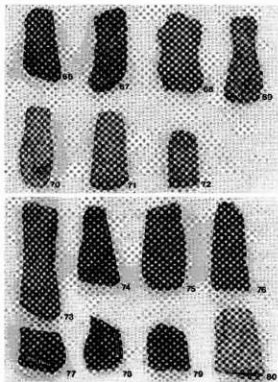
1-4 B. T-PLATE

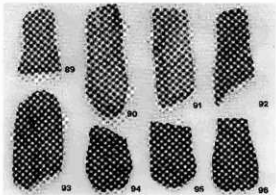
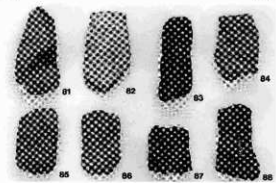


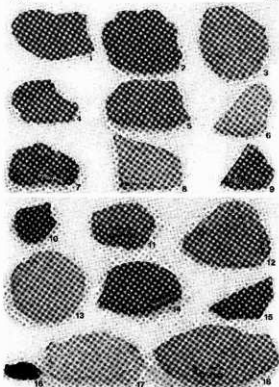


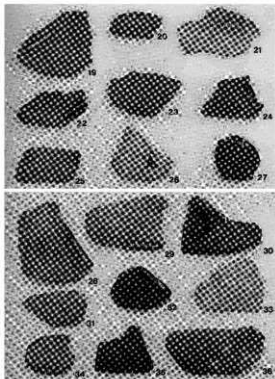


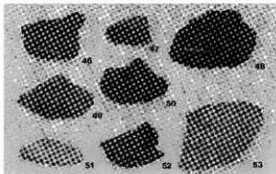
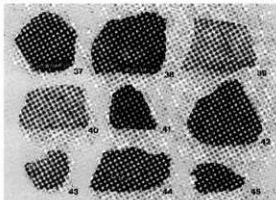


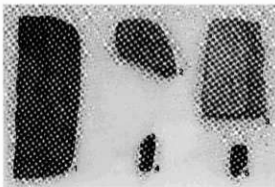
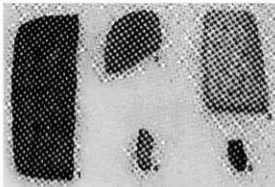


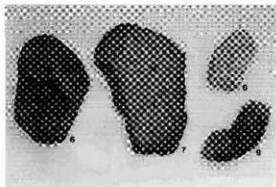


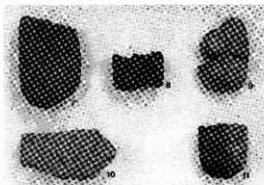
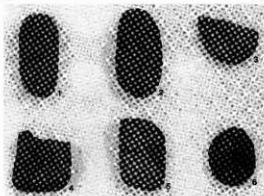


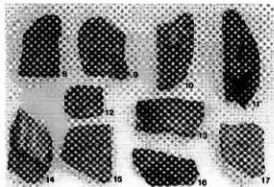
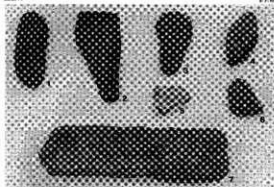


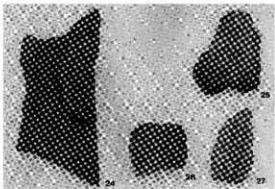
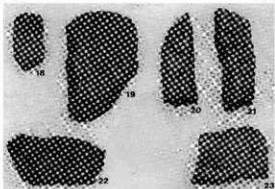


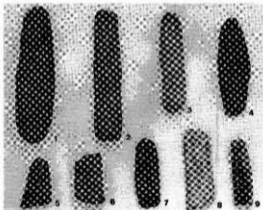
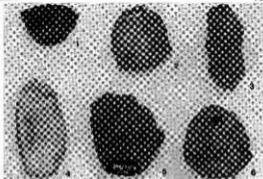












報告書抄録

プロジェクト名	ミナミキョウワ・シニアウイセキ							
番 号	南高研・研古遺跡							
副 題 名								
シリーズ	北下町史跡調査報告書	巻 次	第4・7巻					
編 者 者	北下町史跡							
編集機関	北下町史跡調査会							
発 行 地	〒267-08 埼玉県久米郡北下町大字八幡2-999番地 TEL. 0495-72-1331							
発 行 日	1995(平成7)年3月30日							
ソサエテ 所在地	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査 面積	調査 内容
北下町史跡 南高研遺跡	埼玉県久米郡 北下町大字八幡 2-999番地 〒267-08	113604	020	36°17'30"	139°47'30"	1993/4/2 ～ 1993/4/27	400 ㎡	空中 写真
北下町史跡 研古遺跡	埼玉県久米郡 北下町大字八幡 2-999番地 〒267-08	113604	020	36°17'50"	139°47'10"	1991/4/15 ～ 1991/5/22	1500 ㎡	1/500 空中 写真
所在地	経度	主令時代	主令遺構	主 令 遺 物		研究事項		
所在地	東経	奈良・平安	掘穴遺構4 掘穴埋没物1 土 器1	土 器 (1.深鉢, 浅鉢器) 石製品 (片断等, 燧石) 鉄製品 (鏝, 刀了)				
	中 世	渡 1 土 器1						
所在地	東経	縄 文	掘穴遺構14 土 器140	土器, 土製品, 石器				
	東経	古 墳	掘穴遺構5 円形埴輪1	土器, 土製品				
	東経	奈良・平安	掘穴遺構4	土器, 石製品				

史玉町遺跡調査会報告書第11-7巻

南 共 和 ・ 新 宮 遺 跡

平成7年3月27日 印刷

平成7年3月31日 発行

発行会 史玉町遺跡調査会

〒118-0001 東京都荒川区西日暮里1-10-108

印刷所 ミツバ印刷株式会社

〒113-0033 東京都文京区湯島3-10-108